現代の偉人に感じて此書を

小寛宮吉兄の足下に寄す

昭和二年十月三日

野依記

米國大統領 ローズヴエルト原著
文學士 鎌田繁吉譯述

ローズヴエルト集

定價金四拾錢
郵稅四錢

現代に於ける世界的偉人を數へてローズヴエルト大統領に指を屈せざるものはなかるべし。洵にローズヴエルトは偉人なり。しかも世、偉人の偉を見んと欲するに於て特に茫漠の嘆に陥るもの少しとせず。本書はローズヴエルト大統領が主として國民を誨へんが爲に記述しまた演説せるところを輯録せるローズヴエルトブツクを譯述せる者行文平易にして流暢、よく原著の偉を傳へ得たるが如く、繙讀の間よくこの世界的偉人の風貌を想見し得ると共にまた諄々として教へて倦まざる好夫子を見るを得べし。吾人は浮華輕佻風を成せる現代に於て此の如き良著を世の青年に薦め得ることを欣ぶ者なり。……(日本教育)

米國現大統領ローズヴエルト氏が主として國民を誨へんが爲めに爲せる論説及演説集の飜譯なり「好市民」には奮闘的生活を説き「勇士」には武勇の眞の根抵を教へ其他同大統領が親ら歴戰せる記録等合せて十三編を收む。ローズヴエルト氏が現代世界の大立物たるのみならず遠く華盛頓、リンコルン等と比肩す可き人格なるとは何人も疑はざるところ、まして大統領と我邦との關係は目下の活ける事件なれば我國人が本書に聞くべきもの少からざらむ。譯文簡潔にして明快なり。……(都新聞)

本書は當世政治舞臺の立役者たる米國大統領が折にふれ發表せし文章及び演説を集めたるものにして、氏が好市民として、勇士として、將又開拓者として、狩獵家としての面影は傳へて十分なり。同氏を解釋せんとする人先づ一讀するを要す。……(大阪朝日新聞)

ローズヴエルト、ブツクの譯述にして原書は米國大統領の著作にかゝり主として同氏の演説を集めたり。好市民、勇士、サンジユアン丘の合戰、開拓者、狩獵の各編何れも奮闘的、向上的意氣に滿つ、ロ氏が米國民に誨へたる此の好著は亦以て世界的發展の首途に臨める邦人に無上の教訓を與ふるものならん。……(中央新聞)

米國現時の大統領ローズヴエルト氏の論文及演説等を譯したるもので、原著者は正義の權化、奮闘的勇士の標本と評さるゝ人なれば、其思想議論は剛健にして熱烈なる事猛火の如く、毫も文弱なる點がない、淫猥なる小説類の愛讀者には向かれども、男らしき勇ましき學生は讀んで多くの教訓と奨勵とを得ること請合なり。……(英學生)

版元 東京本郷區駒込西片町十番地
(振替貯金口座第三百五十五)
内外出版協會

博士　スマイルス原著

勤倹論

文學士　竹村修
文學士　若月保治　譯述

全三冊完成
美装合本
定價金壹圓貳拾錢
小包郵税金拾錢

英國のスマイルス氏の原著を飜譯したるものなり。スマイルス氏は中村敬宇氏の飜譯に係る自助論、西洋品行論に由りて、多年來我國人に其名を知られたる人にして、九十年の長壽を保ちたる其間　徳を積み道を行ひ、世道人心を裨益するを以て己の責任と爲し、少年子弟の爲めに教訓的著作を公にしたること幾回なるを知らざる中にも「勤倹論」は「自助論」「職分論」「品性論」と共に　氏の四大著述として最も聲價を博したるものなり。氏の説く所は敢て難きを人に求めず最も平易にして、行ひ易き方法を以て讀者を指導せんとするに在るは何人も認むる所にして、自ら其價値を高からしむる所以なる可し、殊に氏の著述の特色として最も感服す可き點は、其引例の豐富なる一事にして、斯程に多數の事實を蒐集したるものは他の類似の著述に見るを得ざる所、氏が著作に關する勞苦の大半は思ふに此邊に存することなる可し。近來少年子弟の薫陶に關する書籍の發行は枚擧に遑あらずと雖も、其多くは學識も修業もなき黄吻の徒が、筆に任せて一時の思ひ付を述べたるものには過ぎず、寧ろ讀者をして片腹痛く感せしむるもの多き場合、スマイルス氏著作の如き價値あるものゝ譯出せらるゝは喜ぶ可き次第なり、殊に筆致流暢にして難澁ならざるは讀者の滿足する所なる可し。……（大阪時事新報）

版元　東京本郷區駒込西片町十番地
（振替貯金口座番號第三千五）
內外出版協會

博士　スマイルス原著

文學士　若月保治
文學士　栗原元吉　譯述

職分論

全四冊完成
美裝合本
定價金壹圓五拾錢
小包郵稅金拾錢

海老名彈正氏主筆『新人』評　一方には元祿風流行の兆あり、淫靡小說の上下に弄ばるゝものあるに際し又一方には本書の如き健實なる讀物が盛んに青年の間に歡迎せらるゝは喜ぶべき事なり。思ふに最近數年間に於ける社會一般の讀書力は著しく增加したり、されば淫靡なる小說に對する需要も增加したれば健實なる讀物に對する需要も均しく增加したり。前者一方の增加のみを以て社會の風潮を歎くは誤なり、吾人は近時男女青年の方向を誤る者多きを耳にして深く之を悲むと共に、又教會に出入する青年男女の頗る眞面目なるものゝ多きを見て、覺醒の機運亦大に熟しつゝあるを想はずんばあらざるなり。遮莫わが職分論の始め上卷を出すや忽ち世の歡迎する所となり、中、下を出し更に續編を出して世の歡迎を受くる所以も亦我國近來の風潮に一種健實なるものゝ發達しつゝあるを證するものなり。余は職分論譯書の成功を見て益我が樂天觀を確めらるゝが如き感を起しつゝ更に本誌の讀者に向つて斯種の著書を熟讀玩味せられんことを切望す加ふるに譯文明晰原書の主意を窺ふに於て大過なきをや。

版元　東京本郷區駒込西片町十番地
（振替貯金口座番號第三五五五）
內外出版協會

明治四十年九月一日印刷
明治四十年九月五日發行

ローズヴエルト言行錄
定價金參拾錢

著作者　加藤信正

發行者　東京市本郷區駒込西片町十番地　山縣操

不許複製

印刷者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　河本龜之助

印刷所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　內外出版協會
電話下谷二千四百五十三番

静かな急に鳴り出した汽笛のけたゝましさに破れた。やがて起る寺院の鐘の響や、角笛の響やで、世は喋がしくなッた時、隣りの時計の重苦るしい音は十二時を報じた。夜は今や明けやうとして居る。今朝は新年である。

吾等は新年の是等の儀式に耳も聾するばかりである。舊き年が過去てふものに囚はれて、歴史の一部となる時、新しき年は元氣よく出て來る。祝砲の轟き、太鼓の音、軍樂隊の奏樂、すべて是れ今年に起るべき一大事件の神聖を意味するものである。

吁、次の大統領は誰であらうか。

偉人研究第七編 ローズヴェルト言行錄 終

にローズヴェルトを評論したのではない。余は只セオドーア、ローズヴェルト其の人を率直に書き表はしたまでである。そして最後に言ふ可きことは、ローズヴェルトが日頃の行動は、徹頭徹尾、自己の善と思ッた事を即刻實行したのであるといふことである。理想家でなくて實行家、放談の政治家でなくて、實地の政治家である。又余が此の著述は、彼は斯うあるべきであッたとか、斯うであれば可いのだがとかいふ樣なことを論せぬ。只、一個の人間としてのローズヴェルトを有りの儘に傳へたに過ぎぬのである。人間――眞個の人間としてのセオドーア・ローズヴェルト――を描く、是れ余が著書の目的であッた。讀者は各々の胸中の標準で、彼の價を定められむことを望むのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

余が此の最後の數行を認めて、余が稿の將に終らむとする時、夜の沈

が共和黨であるといふことを非常に心配して居た。ローズヴェルトは此の黑人にフラワーといふ名をつけて、左樣呼んで居た。其の事からして彼はローズヴェルトと馴染になり、アルバニーからワシントンまで出世するやうになッたとの事である。

又ローズヴェルトは、屢〻實際に相應はぬ名稱を與へられて居る。例せば「官邸(ホワイト、ハウス)」の門扉が、貧富の區別なく誰でも歡迎する故に、大統領は「貧民の阿諛者」だと言はれ、又富者も貧者の法律に從はねばならぬと主張する故に「資本の賊」だと言はれ、黑い皮膚(かは)にも同じ人間の權利を包むと言ッて「黑人崇拜者」と名づけられ、官職を無暗に廢せずに、成る丈け利用しやうと心掛けるので「官職奴隷」と渾名され、心に浮んだことを直ちに實行するから「輕率家」とも謂はれて居る。

余は玆に世に誤解されたるローズヴェルトの逸事を正した。が、强ち

令の缺點を攻擊し始めたと。是は畢竟するに誤傳である、而も此の誤傳が割合に廣まッて居る。が、大統領に接近して居る者は、之を信ずることが出來ぬ。元來「官邸(ホワイト、ハウス)」では制服の給仕なるものは一人もなく、且つ大統領は生來の禁煙家である。

時として又ローズヴェルトの逸話が半分しか傳はらない事がある。そして其れには屢々面白いのがある。是はローズヴェルトが副大統領であッた時の事、元老院に於て黑人の給仕を使用した破天荒な話がある。そして此の評判一時にカリフォルニアからメインまでも廣がッた。然し、何故に黑人を使用するに至ッたかの興味ある事實は誰も口にせぬ。事實は、此の黑人はローズヴェルトがアルバニーに居た頃から使ッた者で、嘗てフラワー氏當時から知事室に使はれて居たのだ。元來が阿諛(おべっか)者であるから、前の主人のフラワー氏が、民主黨で、今度のローズヴェルト

エルトが脳を一洗せむとして、片手にダンテの原文と、片手にカーライルの譯とを携へて居た事を語りおとした。又ローズヴェルトが形式主義を忌むことを紹介した時にも、形式破壞といッても、ローズヴェルト夫人を携へて大統領室に入ッたり、又は婦人より先に扉を開けて出る樣な不行儀な事は毫もなかッたことを語らなかッたのである。

ローズヴェルトの逸話を書いた書籍は、數へ切れぬ程あらう。そして何れにも相當の信用が置けやう。が、時として非常な誤傳がある。佛蘭西の一雜誌記者が、米國を旅行して「官邸」で晩餐會に招待された記事などはそれである。曰く、大統領が一室で客を歡待しながら煙草を燻らして頻りと談話に熱中して居た。その最中制服を着けた給仕が來て、此の室は禁煙だと告げた。すると、大統領は温和しく。それに應じて廊下に席を移したが、今度は給仕に何故此の樣な權利を與へたのだと、頻りと官舍

の事業を靜に顧み、以て能く將來に過なからしむるに至ッたのである。

本書を著はした目的は、勿論ローズヴェルトの正傳としてではない。故に是を以てローズヴェルトの全體を露はしたものとは謂へぬ。前にも言ッた通り、社會はローズヴェルトと若年時代から馴染であるから、ローズヴェルトの事業の詳細については、別に書く必要も無いと思ッた。故に本書では只、一個の人間として、ローズヴェルトは、何ういふ人であるかを紹介したに過ぎぬ。

而も余が此の書で大統領を紹介し得たのは、十中の六七に過ぎぬ。例へば余はローズヴェルトの失敗を語らずに置くと云ふ樣なことは毫も思はないが、ローズヴェルトが一度失敗した時に、其の失敗を再びせまい、と努力する苦心などは漏らしてしまッた。又余は彼が心機一轉の妙を紹介した時にも、甞て余がローズヴェルトと會ッた時に、ローズヴ

と缺點とを何處までも振り棄てゝローズヴェルトの人物は向上發展するのである。是れ唯りローズヴェルトのみならず、總ての大人物は皆斯の如くであッたのである。

靜にローズヴェルトの事業を見る時、合衆國人民は衷心から、ローズヴェルトに感謝せねばならぬ事がある。それは、ローズヴェルトが隨分苦しい路を辿ッて、此の大統領の椅子を占むるに至ッた事である。全國民の上に懸かり來ッた悲みと耻との雲だけでも、米國人民の堪へ難い所であッた。が、此の雲もローズヴェルト大統領となッて、前大統領の殘した畫策を着々完成したから、すべて安堵の思をなしたのである。若しローズヴェルトにして易々と「大統領官邸（ホワイトハウス）」を占領したとすれば、さうではなかッたらう。大統領となる前に、ローズヴェルトが副大統領の樣な閑職に押し込まれた爲めに、暫く境遇が一變して、熱情氣味であッた過去

此の樣に若年時代から、一般社會と馴染であることは、必ずしも利益ある事ではない。我等を幼少の時から知ッて居る老人は、幾歳になッても、我等を小供扱ひにする。それと同じで、現に立派な紳士となッて居るローズヴェルトも動もすれば社會から若者扱ひにされ、失敗などあッた時には直ちに、まだ智慮が足らぬ、など言はれ勝ちである。

けれども、現在のローズヴェルトは既に確かに成熟したのである。彼が大統領となッて以來、一層その偉大を增したに決ッて居る。ローズヴェルトと雖も、大統領となッたその當時は、急に雙肩を壓した大責任の爲めに始終重苦しい心持から脫し得なかッたであらうが、任に在ること既に十年、今や漸く大手腕が自由自在に振はれる好境となッた。余は勿論今の大統領は無缺點だとは言はぬ。ローズヴェルトも人間である以上は、いつまでも多少の缺點と失敗とは纒ッて來る、纒ッて來る失敗

して、整然たる秩序あるものとした。又彼が米西戰爭から凱旋して紐育か市街を歩いた時、其の鼠色の帽子と、カーキ色の軍服とには、世人は聊の微笑を漏らしたのであッたが、偖愈〻知事となッて活動した時、市民は此の少壯軍人の政治的才能に一驚を喫した。が、ヒラデルヒアで副大統領に撰ばれた時、ローズヴェルトの小說的生涯は暫く一段落を告げた。

是れまでのローズヴェルトの生涯は、言はゞ只長い三番叟である。今後に於ける活動の用意である。此の人こそ未來の大統領であると公衆に覺らしめた徑路である。公衆はローズヴェルトを見ること恰も隣人の如く、腕白の昔から馴染である。結局ローズヴェルトは、米國人民にとりては、何時までもセオドーア君であッて、米國人民はローズヴェルトが若年の時代から、今の偉大な人物に至るまでを、眼前で育て上げたのである。

八十三年の頃から、合衆國の人民は、ローズヴェルトの行動に望みある注目を拂ッて居たのである。アルバニーの少壯法律家として、其の辯舌は大河の堤を崩した樣に、平日嚙み緊めて居る齒の間から流れ出で、閑暇あれば野に大熊を獵ッて、徒らに同僚と酒食の間に歡を呼ぶを避けた。彼は、當時から全國の噂となッて居ッたのである。

殊に此の興味ある少壯法律家が、二十六歳の齡を以て、共和黨を代表してシカゴの政界に來り、大統領選擧運動にブレイン氏と反對したのは、全國人民の注目を一層多く集めた。米國の社會は當時確かに、少壯なるローズヴェルトの人格中に、眞個の國民的政治の資質を認めた。又彼が文官勤務委員となッた時、其の改革の鐵案は上下の戰慄する所となり、能く衆をして文官勤務委員の權威と實力とを認めしめたのであッた又彼が海軍次官の椅子に着いた時、混沌たる海軍部内の積弊を匡正

半生の概觀

ローズヴェルトが事業の概觀――本書を著はしたる所以――未來。

セオドーア・ローズヴェルトが今日までの事業は、近代の政治史上最も類無きものであッて、合衆國人民は終始彼の行動に注目した。元來米國の社會で、偉人と稱せらるゝ者は、大抵極僅かな年月の中に豪くなッて、急に頭角を露はしたのである。リンコンでも大統領となるまでは、只僅少の年を議會で送ッただけで、さしも目立ッたことはなかッた。グラント將軍の如きも、南北戰爭で、武名を天下に轟かすまでは、僻地に在ッて、不華美な生活を續けて居た一市民に過ぎなかッた。クリーヴランドの如きも、一市長の身分から、二年經ずに、大統領に急進したと云ふ有樣、其の他此の樣な例は多くあるが、ローズヴェルトはさうでない。千八百

地方より人撰を始めた。そして此の人撰は決して有識なる共和黨員の怒る所ではなく、又撰出された者も、毫も迫害を受けずに任に就いたのであッた。勿論ローズヴェルトの此の行爲を非なりとして、豫言者がましく公言した輩は、遂に自らの非なるを知ッた。畢竟するに、無駄なる騷ぎであッた。

トの親友と稱する者は、新聞紙上に於て、ローズヴェルトに忠告すらく、南部地方の人民を懲らす爲めに、躊躇することなく、大に黑人に勢力を與へよと。又或る者の忠告に曰く、是は南部地方の民主黨が勢力を得んとての魂膽なれば、宜しく共和黨の一派を作りて、之に對せしむ可しと。又過激なるものに至りては、ローズヴェルトにして身を安全にし、侮辱より免れむと欲せば、一歩たりとも南部地方に足を入るゝ勿れ、家族と共に北方に住みて、決して南部地方を覗ふ勿れとさへ言ッた。

が、是等親友的なのも敵對的なのも、又中立的なのも、すべて他の忠告は、毫も採用せず、ローズヴェルトは斷乎として、皆反故籠の中に投げ入れた。そして一歩も枉げずに、自己の畫策した通りに、或は黑人を登用し、或は白人を黜ける等頗る目覺ましき、改革を爲した。

ローズヴェルトは一歩も退くことなく、終始同じ標準のもとに、南部

けてあッて、ローズヴェルトは顔に笑を湛え、夫人は盛に黒人に御馳走をして居る。此の記章は勿論悪意から發賣されたものであるが、即時に禁止されたのみならず、地方民主黨の識者は、何れも斯かる卑劣の手段を用ゐるを耻として擯斥したのであッた。

無智な激し易い公衆は、ローズヴェルトを以て黒人の救世主の様に褒め狂ッた。彼等は第二のリンコンが出たとも思ッたらう。リンコンによりて枷械を取られた黒人は、ローズヴェルトによりて愈々白人と伍するに至ると思惟した。が、ワシントン自身は、此の問題を雲煙過眼視する位であり、ローズヴェルトも左程に氣を留めず、公衆に演説する様な機會が有ッても、別に怒の色を見せず、只南部地方の人民が、用なき事に噪ぎ立てる無智と愚昧とを憐むのみであッた。

中央の新聞も、此の題目に就いて多くの記事を載せた。ローズヴェル

神經的な南部の數新聞が、此の題目を捉へて仰々しく書き立て、『官邸』の尋常事を、何か南部地方に對する侮辱でもあるかの樣に激論した。そして大統領が今日まで南部の爲めに盡した好意は、今度の晩餐會で水泡に歸したなど丶まで極論し、僞善である、南部に對する似而非同情である、南部地方を一國政界より度外視するものであると叫んだ。そして其の果は、ローズヴェルトの主義もグラントの如く黑人のみを過重するものだと言ひ、口ぎたなき牧師等も又之と和して、政治上の問題を、宗教上の問題と混同し、喧々囂々たる有樣であッた。

ローズヴェルト夫人までが、此の非難の飛沫をかけらる丶に至ッた。

長らく余の机上に置いた或る記章は、即ちローズヴェルト夫人が此の災厄の記念として、余が保存したものである。その紀章の表を見ると、ローズヴェルトと夫人との間に極々野蠻らしい黑人が居る圖を刻りつ

ワシントン氏一人のみでは無い。又南部地方をして、合衆國の政治機關に與からしめ、尊敬の念を以て、白人に政治せしめむとしたる共和黨首領は、南北戰爭以來ローズヴェルトが始めてゞある。(勿論ヘイ氏の如きも例外とせずして)。ローズヴェルトこそは徹頭徹尾の白人でカウカシアンである。又その母統に南部の血脈のあるのを誇りとして居る。リッチモンドが死んだ時は、彼は尙ほ幼少時代であッたから、別に斯う云ふ問題が頭に入ることもなく、四十年前までは沈默の間にあッたのである。が、南部地方を政治上に活動せしめんとする望は常に絶えず、一個内治上の理想として居たのである。そして若し人民にして、よく大統領の意を領し、大統領に欲する儘の活動をなさしめたならば、凡そ此の目的を、彼程理想的に達し得たものは無からうに、悲しい哉、南部の人民は大統領をして自由の行動を取らしめなかッた。

けを示して歸す、といふ事になッて居る。だから、ワシントン氏の姓名も、自ら新聞記者の眼に入らざるを得ぬ。で、翌朝の新聞紙上では、その三面の隅に、朧ろげな名で『アラスカ州タスケジーのブーカー・デー・ワシントンは昨夜大統領と晩餐を倶にせり。』といふ記事が出た。ワシントン氏は、毫も此の招待會を利用するといふが如き事を、念頭に置かなかッたが、ローズヴェルトの頭上には誹謗が雨の如く降ッた。曰く、大統領は政治上の野心を抱いて、斯かる晩餐會を行ひ、多くの領袖の意見に反對して黒人を招待し、以て南部地方に自己の勢力を張らむとすると。

以上の事實なるに於て、若し當時盛に流布された新聞紙上の臆說だに無かッたなら、別に困難な問題も起らなかッたであらう。南部地方の人士は須らく、此の風說によッて、黒人の間に反抗が起ッたのを、新聞記者に謝す可きである。『官邸』にて晩餐會に招待された黒人は、必ずしも

此の招待會は無論ワシントン氏の方からの考案でない、といふ事は確かである。氏は只大統領が氏を欲したから、それに應じたまでゞある、のみならず、氏は大統領と氏との私交上の關係を發表しては、却ッて何か政治上の意味でも含まれて居ると誤解される虞が有るから、出來るだけ此の招待の件については、新聞紙上の報道を避けた。尙ほ氏の友人某の如きは、此の事につきて、態々余の許に相談に來た位、そして其の相談も大牢行はれたが、大統領は斯かる事を一向心に懸けなかッたから、公衆が知るに至ッたのである。

『官邸(ホワイトハウス)』で招待會に列した時も、ワシントン氏は、成る丈け他の訪客との會見を避けやうとしたが、官邸の慣例上、已むを得ない事が多かッた。元來官邸では、新聞記者などの便利を計ッて、入口の受付に必ず招待客の姓名を記して置く。さうして新聞記者が訪問した時は、此の記名簿だ

此の理想を、ローズヴェルトは直に實行しやうとして、南部地方に代議士を指命し始めた。そして南部地方も、此の機に會して頗る色めいて來た。ローズヴェルトは斯樣にして、千九百〇一年の十月頃、各方面からの好評嘖々たる間に、黑人ブーカー・ワシントン氏を『官邸（ホワイトハウス）』の午餐會に招待した。

此の招待に就いては毀譽相半ばして居たが、何人も此の事に對して、容喙し干涉す可きではなからう。ワシントン氏はローズヴェルトの最も敬愛する友人の一人で、其の知遇を誇りとして居る人である。その談話の際も、官職上已むを得ない塲合の外は、互に對等の態度を以てする位、故に如何なる酷評家が、是の招待會を攻擊するとも、そは招待會そのものゝ非にあらずして、其の時期の稍ゝ適當ならざるを責むるに止まる可きである。

勿論、南部に對するローズヴェルトの此の態度は、ローズヴェルトの眼中、只一の目的あるのみだからだ。目的とは何ぞ、曰く、革命。ローズヴェルトは當時の南部の共和黨に對し、如上の態度を取ッて、破壞的挑戰をなしたに他ならぬ。南部共和黨の首領等の胸に刻まれたローズヴェルトの言葉は、『余は只收入をのみ目的として團結した所謂黨派には毫も存在の必要を見ぬ。余が今後再選せらるゝと否とに拘はらず、余はかゝる黨派の爲めには、畢竟、秋毫も義務の念を抱かぬ。余が平常の思想は即ち、共和黨の勢力なき州は、只中央政府の指揮に從ふのみなる故に、合衆國の平等政治の理想と相反することゝなる。そして各選擧區より平等なる議員を選出することゝ矛盾する。故に今後は合衆國を治むる上に、必ず白黑兩人種から、兩黨に同數の代議士を出すやうにせねばならぬといふことである。』大統領の固い意志は是れである。

とも、善良なる市民たらむ努力により、白人より尊敬を受け、其の住居する市都の便宜を計る者は、假令その皮膚は黝黑なりとも、決して現大統領ローズヴェルトに遠慮する必要はない。が、若し懶惰な生活を送り、個人として、團體として、白人に對する義務を怨せにするものは、假令その皮膚が白からうが、共和黨であらうが、大統領から嫌はれる。

個人としての人格と、市民としての道德とは、即ち大統領が黑人に強ひ、黑人を重んずる所以であつて、ブーカー・ディー・ワシントン氏(名ある黑人なり)に對する態度によりても明白に判る。黑人を官途に登用するはローズヴェルトの毫も意に介せざる所で、黑人を用ゐるに當りては、只その人材の適否を見るのみであつて、他の一切は毫も顧みぬ。』

れから一ヶ月程後の紐育夕刊新聞に、余が掲げた、南部問題に關する記事は即ち余が當時の所感である。今之を再錄すると、

『大統領は、黨派の人としては、民主黨よりも共和黨を撰み、不確な無責任な黨派よりも堅固な黨派を撰んで居るのは事實であるが、假に民主黨が共和黨よりも正當である場合があれば、一瞬時も躊躇せず、民主黨の人となる。

ローズヴェルトが常に懷抱して居る希望の一ツは、南部地方に政治上の自由を與へることで、共和黨がワシントンに勢力を得る度に、南部の地方は常に局外に立ちて不關焉で居るのを遺憾として居る。そして此の弊を破ることを以て一種の大なる誇りとして居る。

黒人には須らく白人と同等の權利を分たねばならぬ。黒人たり

に最も困難を感じて居た。それは黒人問題は兎まれ角まれ、皆その選擧には黒人の投票を仰いで居り、將來にも多く其の援助を得むとして居たから、頗る行動を不自由にされた譯だが、ローズヴェルトだけは、其の大統領となッた所以が大に違ふ、故に自由自在な行動が執れる。黒人と云はず、白人と云はず、南部と云はず、北部と云はず、一千九百年の選擧にあたッて、ローズヴェルトは彼等に何物をも負うて居らぬ。ローズヴェルトは副大統領となるを極力自ら防いだのであッた。そして不承々々に副大統領となッた後は、南部の黒人も同じく、他の選擧區と共に政治上の行動を執る可きであることを主張した。

前大統領マッキンレイ氏の葬式がワシントンで行はれた時、余はローズヴェルトと葬儀の假舍中に一時間ばかり語り、種々な政治上の問題に就いて聞き、そして其の談話の毫も偏頗なく公正なるに驚いた。そ

南部と黑人問題

混同されたる二問題――未曾有の策略――それを堂々と着手する理想的の場合――午餐會――無駄な騷ぎ。

合衆國の政界に於ける南部の問題は、革命以前は大體の上に於て二種の黑奴問題であッて、少なくとも、黑奴問題が最も重きものであッて、他の小問題は其れが爲めに多く顧みられずに過ぎる程であッた。元來政治上の問題と云へば、いつでも經濟的方面が第一に注目さるゝのであるが、南部では黑人問題が重大であるによッて、在住の白人は何れも其の人種的反目の爲めに一致し、他の小問題を顧みる餘裕がなかッたのである。是が所謂南部の一致である。黑人反對と公認されて居た民主黨は、その公認に乘じて、愈々黑人に迫らんとした。

共和黨の方では、グラント以來の大統領が、何れも施政上南部の問題

まいか。

大統領ローズヴェルトは天才ではないが、彼は生れ付き異常なる能力を持ッて居ると云ふ可きだ。著述家として、法律家として、行政家として、狩獵家として、闘技者として、軍人として、皆彼は成功した。行く所として可ならざるは無しだ。苟も健全なる體力と智慮とによりて成さるゝものは、ローズヴェルトが總て之を爲して居る。ローズヴェルトが其の同輩以上にどの樣に豪いかと云へば、好んで困難な事業を爲したことと、生れつきの智慮で能く其の事業を選擇し、能く把持し能く遂行したことである。ローズヴェルトは他人が絶望して投げ捨てた事業を、善良な方法で成就させ、常に公然と全世界を前に靡いて働いて居る。

を開くには至らなかッた。此の樣な外交手段は、無論英佛獨の樣な國に對しては行はれぬ。且つ英佛獨等の國で事件が起ると、三日以内に其の詳細が判るが、土耳古では左樣ゆかぬ。土耳古で實際事件が起ッて、其の事件の賠償として、土耳古錢でも拂はれたら大厄介である。此の一事にも大統領の直截な遣り口が見えるではないか。大統領は土耳古の樣な貧弱で而も狡猾な國を對手にする時、活動を二倍にすれば、二倍の效果があることを能く心得て居る。土耳古は突如として米國軍艦が近海に浮び出た時、眞に仰天したであらう。大統領の處置は確かに當を得たものと謂はねばならぬ。

土耳古帝も局外者も皆此の派遣艦隊の目的を知ッて居た。即ち米國公使が提出する要求に強い後援を與へる爲めである。戰鬪を開く爲めではない。米國大統領が此の手段に出たのは、深き智慮の一ッではある

ズヴェルトの事業の明々白々なるは能く後代の人をして事件の眞相を得しめ、健全なる判斷に導くに違ひない。

數年前の夏、シリアのベイルーに駐在の米國副領事マガルセン氏が暗殺されたといふ評判が高くなッた。是を聞くや、大統領ローズヴェルトは、別に公報も待たず、即座に艦隊を土耳古に派遣した。元來土耳古から來る公報は、いつも長時間かゝると噂されて居るが、ローズヴェルトが公報を待たずに即座に艦隊を派遣したといふことは、世界の驚愕であッた。ローズヴェルトが此の機敏の行動は、外に於ては忿怒で、内に於ては一種のジンゴイズムであッた。或る者は評して、土耳古の樣な貧弱國が對手であッたから、一呑みにしての亂暴沙汰である、とまで言ッた。又或る平和主義者は、大統領は實に好戰家であると言ッた。

が、戰爭には至らなかッた。幸にも暗殺の噂は事實無根であッた、砲門

ローズヴェルトは即ち此の第四の道を取ッたのである。

實に此の第四の道こそは、ローズヴェルトに取ッて唯一の道であッたのである。そして此の道に全力を竭した。此の道を取るの是非については、世に之を論ずる人もあらう。茲では單にローズヴェルトの性格を表はす爲めに之を語れば足るのである。能くローズヴェルトを識ッて居る者は、必ずや、此の性格が、如何に諸事件を處理してゆくか、を曉るであらう。又ローズヴェルトを識る者は、必ずや彼が最後の目的から瞳を放さぬことに氣つくだらう。パナマ事件に於ても、目的は運河の開鑿にある。他の人が手段に就いて云々し過ぐる時、彼は例の猛進主義で、運河開鑿に直進したのである。吾人の子孫は、ローズヴェルトがパナマ事件處理の好結果を充分に見ることを得やう。ローズヴェルトの直截公明の處置は、決して後世の史家を惑はしめる樣な曖昧な點を殘さぬ。ロー

く彈丸を交へずして歸國した以上は、大統領の執るべき道は四ッあッたのである。即ち大統領は議會の特別召集まで、其の事件を無爲に延ばし、そして急に全體に亘る通牒を送ッたなら、國際の禮儀にも適ふ、が同時に責任を他に讓ることになるかも計られぬ。第二は、大統領は暴徒を直ちに鎭め、コロムビアに其の政權を返したならば、コロムビアの政府は直ちに我に應じたらう、そして千八百四十六年の條約の保證となるが、同時に治者の承諾なしに政權を執ることゝなるから、ヒリッピン保留に對して同じ種類の攻擊となる。第三には、地峽の近海から我が艦隊を退かせて、ボゴタをして海上より兵を送らしめ、暴徒を制せしめることが出來たらう、が、是は戰端を開くに至る虞れもあり、海運を妨げ、且つ佛蘭西を干渉せしめて一層の葛藤を來たすことゝなる。第四は、穩に平和を維持すべき獨立の一政府を承認し、之と通商を計ることで、大統領

領は餘りに急に葬式の調理を結婚式の御馳走にしたと云ふ嫌ひはあるかも知れぬが、ローズヴェルトは、之を公然と實行した。毫も秘すことなく、躊躇なく、顧慮なく、口實も設けなかッた。勿論秘密の畫策もなければ、亦後日に白状するやうな點も無い。そして革命が起ッた時も、一向無頓着であッた。大統領としては、ローズヴェルトは常に事件の生じさうな問題を論ずることを控へたが、個人としては、其の親友間の談話に、未然の事柄もよく斷言して居た、獨りパナマ事件に限らぬ。萬事ローズヴェルトの遣り方は斯うである。

パナマ事件後、一政治家が次の樣なことを言ッた。

『若しコロムビア政府が、地峽に行動を取ッて、そして改革者が暴動をなしたとて、此の暴動は直ちに米國政府の力で壓せられたらう。コロムビアの軍隊が地峽に勢を得ず、且つボゴダ政府の爲めに働いた者も、多

和國との間に於ける地峽條約の失敗は、既に不平の項點を示したもの
であッたから、誰しも早晩破裂のあるを期待して居た。ヘイ、ヘラン條約
の調印さるゝまでは、コロンビアが、之を批准するか、或はパナマが全く
自國だけにて問題を落着せしめるか、の二途を出でずと思はれ、ワシン
トンの外交家も皆、ボゴダ政府が地峽問題に軍隊を出すを不可能と信
じて居た。大統領マロキンもヘラン公使も能く其の反對の場合を考へ
て置いた故、雙方とも此の條約を押し徹さうと斷行したのであッた。
彼等の努力が失敗となッた時、豫期の事が起ッた。即ちパナマは獨立
の行動を取るに至ッた。さはれ、此の局面變化は毫もワシントンの政治
家を驚かさぬ。僞善的な涙を流す者もなければ、本心に無い慰藉の書を
贈る者もない。否々、之と反對に、大統領は直ちにパナマの獨立を承認し、
瞬時にして、合衆國との國際商議を開いた。或る評家の言ふが如く、大統

らである。米西戰爭の後に、彼が或る場所で演說したる中にも、此の猛進主義が表はれて居る。卽ち其の演說中、戰爭當時、自分の軍隊が指揮官を失ッて、命令者が無くなッたことを語ると、聽衆の一人が『その時何うなさいました』と問うた。すると、ローズヴェルトは直に、『何も躊躇せぬ。私の主義は平常斯うだ、迷ッた時は前進する。卽ち私は前進した。』

尙ほ近くは彼のパナマ事件にも、ローズヴェルト大統領の猛進主義が見えて居る。パナマ事件の處斷が善であるか惡であるかの問題は、茲で論ずべき限りで無いから言はぬ。唯大統領その人の人格の大部が、如何に猛進主義から成り立ッて居るかといふことを、充分に明かにすればよい。

パナマ割讓が確かに全世界の驚愕であッたことは誰も知ッて居る。コロンビア共和國と同國とは固く聯合し、且つワシントンとボゴダ共

ことを公然の秘密として居たのみならず、紐育の州會も、各々我慾の爲めに指名を主張した。新にブライアン黨が勢力を得たといふミスシッピイ地方の政客までが、盛んにローズヴェルトを副大統領たらしむ可しと主張した。竟にローズヴェルトは恨を呑んで副大統領の閑職を辱うした。逃亡以外のあらゆる手段を盡したが、到底避く可からざる窮路であッたのだ。が、不思議な運命の手は何處までもローズヴェルトを援くるに似て、思ひがけなき變事が此の閑職に沈んだローズヴェルトを引き擧げ、一億八千萬の國民の最頂位に置くに至ッた。

此等の失敗乃至失望を、幸運の種とはいふもの丶、若しローズヴェルトにして、斯かる窮路に會して忽ち落膽し、自ら助くることをせぬ人であッたならば、今日の榮冠は得られなかッたに相違ない。彼が今日あるは、全く、幾度躓いても、躓く度に奮起して、毫も躊躇せず、大膽に進んだか

にも不幸が轉じて幸となッた例がある。愈々開戰となッた時、若しリー將軍にしてローズヴェルトに與ふるに參謀の重任を以てしたならば、ローズヴェルトが一生の花であッた驃騎隊(ラフライダー)の活動は出來なかッたのである。總て天は自ら助くるものを助くる。ローズヴェルトが紐育州の知事となッたのも、即ち此の驃騎隊の戰功が原因をなして居るのである。

悲むべき失望がローズヴェルトの上に起ッた。即ちローズヴェルトは紐育州知事として再選を望んだが、共和黨の有力者は、擧ッて之に反對し、其の反對の實を擧げむ爲めに、ローズヴェルトを薦むるに副大統領の閑職を以てした。副大統領となッて活動の手を括られるやうな不愉快が復たと有らうか。ローズヴェルトは知友と謀りてあらゆる手段を盡し、此の閑職の犧牲となるを防いだ。極力その指名を拒んだが、大統領マッキンレイを始め、議會の識者は、何れも選擧を止めて指名に依る

直ちに其の言を用ゐて、ローズヴェルトを國務卿となしたであらう。が、彼は國務卿たらずして民勢調査委員となッた。

茲で彼は伎倆を試みるに充分の地を得て、後來の統括的性格を養成し、大成功の基礎を築くに至ッたのである。ワシントン政界の人となッてから六年、故郷の政治に關渉（たずさ）はッて見たいといふ舊念が再發して、遂にストロング市長の乞に應じて警務改正委員となッた。が、其の結果は失望、ローズヴェルトの改正案には目覺ましいものが無いではなかッたが、既に同僚の一人が、總ての要地を占領して居て、ローズヴェルトが改革の手腕を下すべき所がなかッた。やがて大統領マッキンレイ氏の推擧に依ッて海軍次官となッたのは、ローズヴェルトの爲めに一の幸で、ローズヴェルトも悦んだのであッた。海軍次官の職に就いて、米西戰爭を促進したのは甚だ痛快で、茲で又軍人としての經驗を得た。此の際

るのである。ローズヴェルトの意志は自然に勝ッたと言はる。新しき勝利ある毎に、新しく自信力は增進し、新しく增進した自信力は、やがて偉業を爲すの原動力となッたのである。天は自ら助くるものを助く。天は確かにセオドーア・ローズヴェルトを助けたのである。即ちローズヴェルトが全力を竭して不幸にして失敗した事があッても、天は何處よりか不思議な動機を其の失敗の中に織り込んで、失敗を成功の基礎としてしまふ。例せば、若しローズヴェルトにして、千八百八十六年、紐育市長として當選したとすれば、彼は確かに當時の風潮を追うて、其の任期の滿ちた時、更に再選せられんことにのみ努めて、遂に凡庸政治家と爲り果てたかも知れぬ。而して中央政府とは何等の關係もなく、ハリソン大統領の參事官とは爲り得なかッたに違ひない。又、ブレイン氏にして、ローズヴェルトを國務卿にせん事を大統領に願ッたとすれば、大統領は

偉業の祕訣

半生の進路――失望の善用――猛進主義――地峽問題――四ッの策――土耳古問題――成功の處方箋

『西洋人の性格を有する東洋人』だと、元老院議員デピウ氏はローズヴェルトを評したが、これは眞理の半面に過ぎない。デピウ氏は寧ろ、ローズヴェルトを以て全世界で一番偉大の人であると言ってもよかったのである。ローズヴェルトは、安樂な境涯に生れながら、自ら敢て困難なる道を辿った。政治を嫌忌する交際社會の人でありながら、敢て自ら政治家となった。虛弱な體質に生れながら、スパルタ的の訓練で鍊鐵の樣な堅固な身體となした。精神上にも道德上にも孤獨的な要素を具へて生れながら、無限の努力を以て、躬ら立派な首領的性格を養成した。

すべて如上の遂行が出來たのは、畢竟するに、偉大なる意志の力に依

斯様にローズヴェルトは國際間に醇美なる平和を保つを一ッの重大なる天職と心得て居る。ローズヴェルトこそ實に最も偉大なる平和愛好者ではないか。而も彼は正義の爲めには進んで大難に當る勇者である。彼は人類の福祉を增進する爲めには、時として戰爭をも辭せぬ。ローズヴェルトこそは實に最も完全なる意義に於ての平和主義者であり、好戰家である。

歐洲の各評論家は勿論、米國の識者も、多くはローズヴェルトの此の行爲を懸念した。思へば大膽なる行爲では無いか。歎願書を取次いで露國に干渉するのは、露國の感情を害しはすまいか。露國若し感情を害して之を拒絶せば、米國の態度を如何にするか。ローズヴェルト大統領は、如何なる事も顧みず所期を遂行せむとするか。竟に戰爭に至らざるか、戰爭に至らずとも、永く國交上に惡感情を貽すことゝはならざるか。

されども、是等は總て空なる懸念であッた。事は滯り無く進行して、露國政府は穩に右の歎願書を受け容れたのである。露京駐在の米國公使は、よく大統領の意を含んで首尾よく遂行し、全猶太人の歎願は容れられ、北米合衆國が人道を重んずる國是は、明瞭に世界の認める所となッた。惡感情が何處に起らう。歐洲諸國は何れも米國の公義に耻ぢたのである。

合衆國及び西歐諸國に在る猶太人は、各々其の居る所の國の政府に依賴して、書を露帝に贈らしめ、以て在露の孤立無き猶太同胞を保護しやうとした。尙ほ彼等は此の目的を一層有効に達せむ爲めに、世のあらゆる宗敎家、博愛家等の賛同を乞ひ、直接の外交手段に依賴して、露帝に書を致さむとまでに決心を固めた。

外國に於ける猶太人の此の運動を見ると、露國政府は各國に通牒して、該事件は毫も外國の干涉を要せぬ、全然國內の騷擾なれば、露國政府のみにて適當に處理すると宣言した。すると、歐洲各國は皆手を引いたが、合衆國だけは然うでない。ローズヴェルトは露京駐在の米國公使をして、公然露帝に通ずる所あらしめむとしたが成功しなかった。そこで、ローズヴェルトは、更に猶太人等を慰めて、其の歎願書を作らしめ、是を露帝に送達することを誓った。

らねばならぬ。モンロー主義、北清事變、キシチフ事件、平和會議、日露戰爭等に對する彼の態度は、何れも彼の誠實なる平和愛好者たるを證するものである。茲には單にキシネフ事件だけを語ッて、平和的なるローズヴェルトを見ることとしやう。

一千九百〇三年の耶蘇復活祭日に、露西亞の一都キシネフで一揆が起ッて、老幼婦女の區別なく、猶太人を虐殺した椿事は、端なくもローズヴェルトの正義心を明白に世界に紹介するに至ッた。虐殺の當時、露國の地方官及び政府は、嚴に之を秘せむと力めたので、虐殺事件の眞相は却ッて紐育に逃げ來れる二三の彼害猶太人の話に依ッて世界に廣められた。恐らくは露帝さへもそれに依ッて始めて詳しく知ッたのであらう。露帝は外國の注意で漸く自國の騷動に氣が付き、暴徒の巨魁と無責任な地方官吏を罪し始めたとのことである。

西班牙に勝ッたのは、必ずしも玖馬島放任では無い、必ずしも厄介なる比利賓群嶋の割譲ではない。合衆國に取ッて尚ほ重大なる意義がある。議會が誰一人の不賛成者なしに、國防費として五千萬弗を大統領一人の手に託した事や、二億弗の内債募集が直ちに七倍の申込額に達した事や、戰爭はしても經濟上に痛痒を感じなかッた事や、二回の大海戰に未曾有の威力を示した事やが、實に舊世界をして、合衆國の恐る可きを悟らしめたのであッて、それが米西戰爭の齎らした一大効果である。同時にローズヴェルトの戰功も永く記憶せらるゝであらう。

右はローズヴェルトの好戰的閲歴の一斑である。單に是れだけ見れば、ローズヴェルトは如何にも戰略に長じ、戰鬪に興味を有する攻伐家の樣に思はれる。是れ實に一部の社會より好戰家と目せらるゝ所以であるが、平和の渴仰者としてのローズヴェルトに就いては更に多く語

やがて間もなく愉快なる喝采の下にローズヴェルトは現はれ、大統領マッキンレイ氏と暫時談ッて後、徐に壇に登ッた。そして先の日大統領の前に陳べたよりも、一層精しく明快に適切に說いた。ローズヴェルトが降壇の後、大統領は一同を一瞥した。三四人の笑ッた者があッたが、中には驚嘆して、四十に足らざる少壯のローズヴェルトが、國家の爲めかくまで精細なる畫策をなしたを偉なりとした者もあッた。兎に角その日よりは內閣でもローズヴェルトの聲高く、ワシントン倶樂部の雜談でも、此の話で持ち切られて居ッた。

二ケ月を經過して、デュウェー將軍がマニラの勝利傳はると、曩に笑ッた閣員も、皆ローズヴェルトの先見に服せざるを得なかッた。斯くてローズヴェルトの畫策は殆んど全く圖にあたり、ローズヴェルト自身も驃騎隊を率ゐて出征した。

『その時こそ米國から艦隊を出して、洋上に邀擊し、即刻開戰の宣告をなすのだ。』

當時の內閣では、未だ議論が一致して居らず、各大臣は主戰說、平和說と相分れて、區々の意見を抱いて居た。大統領マッキンレイ氏は、ローズヴェルトが旣に成算ある畫策を抱いて居るといふ事を聞いて、一日官邸にローズヴェルトを招いて委しく其の計畫を聽いた。後、閣議の際に、マッキンレー氏は、起ッて演べて曰く、『海軍省のローズヴェルト氏には、旣に整然たる戰略が出來て居る。其の畫策は、到底諸君が半ばも考へ得ない程、精密に調査してある』と。すると、座の一人が、

『ではローズヴェルト氏を此處に呼んで聽いて見ては如何でせう。』

『それがよい。では早速ローズヴェルト氏を呼んで、其の畫策を直接に聞きませう』と大統領は答へた。

が二三の省員と海軍省の一室で談話を交へて居た時、突然西班牙はセルヴェラ將軍をして艦隊を玖馬に向はしめたといふ急報が來た。するとローズヴェルトは急に座から立ッて、腕を扼したが、恐ろしい聲で、

『余が思ひ通りになるなら、今日直に西班牙に通牒して、合衆國は西班牙の此の行爲を戰意あるものと認めると言ひたい。それにも拘はらず、艦隊派遣を中止せねば、直に最後の手段を取る。』

『實際艦隊を派遣するとは穩かならぬ行爲だ』と座の一人が言ふと、ローズヴェルトは、

『勿論だとも。玖馬には戰ふ程の暴徒も無い、艦隊派遣は全く米國を威嚇せむ爲めである。』

『若し通牒しても、艦隊派遣を中止しない時は………』と又一人が言ふと、

の頭を衝突させたといふ。是は頗る面白い奮闘的平和主義者の態度と謂ふ可きではないか。

ローズヴェルトが戰爭まで賭して玖馬島事件に干渉したのも、終局（つまり）は避け難い運命だと思ッたからである。事實、西班牙が玖馬に手を出して居る間は、合衆國の南岸は永久に其の腐敗の風を受けねばならぬ。玖馬は賄賂、公行、叛逆、殺人、黑死病の泉源、罪人の逃避所である。玖馬が西班牙の配下にある間は、合衆國は傳染病と隣り合はしたも同然だ。いかに合衆國の平和主義が重いにしても、米西戰爭は早晩始まる可き運命である。さらば、一刻も早いが可いとは即ちローズヴェルトの考であッたのだ。

偖、愈々戰爭が避けがたいとなッて見れば、ローズヴェルトは一刻も猶豫を欲せぬ。千八百九十八年三月の或る日曜日の朝、ローズヴェルト

は實に大統領ローズヴェルトの欝勃たる野蠻的奮闘的精神の發現である。是等は筋骨を頑强にし、神經を均齊ならしめる。一朝事變來るも、平然として之を處理し、機敏なる判斷は決して大事に迷はぬ。實に是等の遊戲は合衆國の頭腦に無限の智力を供する泉である。ローズヴェルトは、是によりて自利し、自負し、自信するのである。

ローズヴェルトは、總て奮闘とか競爭とかいふ遊戲を以て、各個人が生涯の訓練に最も良いものだと信じて居る。そして各個人に善き事は、必ず國家の爲めに善いと信じて居る。元來競爭奮闘は、目的に驀進して他を顧みざる氣質を養成する。かの一度は必ず到來す可き職分を徒に避けむとするが如き者に、いかで偉大なる事業が爲し遂げられやうぞ。ローズヴェルトが學校時代に、他の學童が喧嘩をするのを見ると、直に兩手で二人の襟首を摑んで制した、制して聽かなければ、聽くまで二人

國家の罪人の如くに嫌忌する。故マッキンレー氏は、政治上の煩累を毎夜必ず一掃して、睡眠には何の心配も殘さなかッた、と其の友人は傳へて居るが、ローズヴェルトは、就眠前、既に野外の運動や遊獵で疲れ切ッて居る。實に『健全なる疲勞』である。是れ政治上の煩累が増すに從ッて、ローズヴェルトの健康愈々勝れる所以である。此の毎日の野外運動の爲めには、集會も、宴會も、雨天も、決して顧みぬ。野外運動は、實に、ローズヴェルトが生涯の事業の一部である。

政治上經濟上の諸問題を解決處理すると同じ職分の觀念を以て、ローズヴェルトは野外に健康を練る。ローズヴェルトは自己の健康を見ること、恰も合衆國の國土を見ると異ならぬ。自己の健康を妨げるものを、恰も合衆國の國土を侵す者の如くに憎む。

大熊狩、長距離競馬、拳闘、荒地の二十哩徒歩競爭、斷崖の攀登競爭、是等

を殘して、未來の進歩を築く基礎として居ると云ってローズヴェルトは決して野蠻でない彼は雉子を打つにも係蹄にかゝッたのは態々放す野獸を獵しても長くは傷手に苦しませぬすべて慘酷といふ點は毫も無い其の家庭を見ても、家畜の數は算へ切れぬ程ある馬、犬、さては南洋の鳥まで飼ってあって、子息等は懼れず之と戯れて居るそして嚴父の戒めは常に『愛してやれ』である。

ローズヴェルトが遊獵家として他より異なるは、決して狩獵を遊戯視せぬ點にあるローズヴェルトの狩獵は生涯の活動準備である彼は消暇の爲めに獵馬に跨らぬ彼が肩にする獵銃には、實に深甚なる意義が藏せられて居る。

心身の健全は、實にローズヴェルトが世界的活動の基礎とする所で、ローズヴェルトは、優柔懶惰なる生活をなして、身體の健康を失ふ徒を

(七)苟も獨立して正義を行はんとすれば、陸軍と海軍とに十分なる戰鬪力あらしめねばならぬ。常に軍隊を演習せしめることが即ち平和で、正義の有力なる主張である。

是れは平凡な解剖に過ぎぬが、而もローズヴェルトの主戰論は、總て此の中に含まれて居る。或る者は言はう、ローズヴェルトは毫も戰爭の恐る可き惡結果を語らぬでは無いか、殺伐の氣風盛んとならば如何に、人道平和の觀念薄らがば如何にと。然し、ローズヴェルトは決して是等の點を藐視したのではない、唯語らぬに過ぎぬ。ローズヴェルトは從來の亞米利加が餘りに平和を口にするを戒めたのである。

戰鬪と狩獵とを以て未開的人種の特色となし、而もローズヴェルトは此の未開的狀態から脫しやうとはせぬ。ローズヴェルトは、人類の進步發達とは、過去の野蠻的狀態を一擲することとは解せぬ。過去の良所

は國家と國家とが互に呑噬を謀り、內は國民が動もすれば治者に反抗するといふ今日の狀態である。

(三)讓步に讓步を重ねた因循姑息な平和は、內に不正義を蓄へて居る。是の不正義は、攻伐侵略を事とする呑噬主義の不正義と何の擇ぶ所も無い。

(四)何物よりも平和を尊しとして、あらゆる犧牲を惜まぬ國は、旣に道義上墮落して居る。善惡の判斷が鈍ッて居る。さういふ國は決して文明を誇る權利が無い。

(五)此の樣な平和國には、二三回も我が正義の主義を徹回すれば直になれる。そして外交には何時でも他國の自由にならねばならぬ。

(六)何んな犧牲でも拂ッて戰爭を避ける平和國は、今の世に成り立たぬ。成り立てば、他國に弱味をのみ示すに過ぎぬ。侮蔑は忽ち來る。

爭戰爭と叫んで居る、が、彼は決して戰爭を好んでの主戰論者では無い。彼は驃騎隊の經驗によって、何人よりもよく戰爭の悲慘を知って居るのである。

然し、米國の人民は擧って、ローズヴェルトを以て、人生の悲慘を敢てする主戰論者の樣に思って居る。ローズヴェルトの主戰論は、甚だ誤解されて居る。ローズヴェルトは、文明國たるものも、尙ほ戰爭の避け難きを認めるに過ぎないのである。茲にローズヴェルトの主戰論なるものを大略解剖して見れば、

(一)若し人類が完全の發達を遂げた曉には、永久不變な尊い平和が來るかも知れぬ。其の時は勿論、一の種族が他の種族の不利をも顧みずして、我慾を主張するといふが如き事は皆無でなくてはならぬ。

(二)が、不幸にして、人類は未だ發達を遂げ盡くさぬ。所謂弱肉强食で、外

誤解されたる主戰論――生涯の活動準備として男らしき遊戯――西班牙に對するローズヴェルトの態度――キシネフ事件

『何時如何なる事で外國と交渉が始まるとも、吾人は必ず充分の敬意と尊重とを以て之に接せねばならぬ。吾人は正義を重んずることを明かにせねばならぬ。之と同時に、他より正義に背いて取扱はるるときは、飽くまでも之に反抗する。又吾人の言語の後には、實行が添はねばならぬ。常に口と手とを一致せしめる方針こそ、實に自重する國民の本領であつて、又自治國民の目的である。』

ローズヴェルトの此の言を茲に掲げずして、ローズヴェルトは戰爭を好まぬ、と言つても、讀者は承知すまい。事實、ローズヴェルトは屢々戰

に跋扈せしむとせば、それこそ實に攻擊し排斥せねばならぬことだ』と叫んだ。

此の事が世間に流布すると、ローズヴェルト反對黨は、直にローズヴェルトに對して、彼はシャイデーの如き罪人を保護する、眞に職俸分捕屋である、と鋭く攻擊の矢を放ッた。すると、ローズヴェルトは全く反對黨の意外に出て、自ら演壇に現はれて、公々然と事實を語り、苟くも政治上の改革をなさむとせば、其の眞を語る者は之を保護せねばならぬ。徒らに眞を語る者のみを罪するときは、眞を語らぬ眞の詐僞狡猾者流のみが世に跋扈するに至るを免れぬ。是れ千載の弊である。二三の罪人を罰する小善は、須らく天下の罪人を罰するの大善に讓らざる可からずと說いた。

此の公明正大にして、而も威嚴の具はッたローズヴェルトの態度の冒し難いのに、反對黨は全く屈服した。そして『是が眞の道である。若し事實の眞相を打明けたシャイデーを罪して、他の一層大なる罪人を社會

斯んな風で、有らゆる事實はシャイデーが打ち明け、豫想以上の大詐僞、大狡猾が發かれた。選擧者名簿の如きも、非常に實際と相違して、投票者の名前なども、自由に抹殺したり、附加したりしてある。そしてシャイデーは、此の抹殺附加は、自分の手でしたが、指圖は全く局長の方寸で、局長が他の選擧區と合同の詐僞を企てゝ居ることまで明言した。

ローズヴェルトは、此の豫想外の腐敗に一驚を喫した。そして此の罪深きシャイデーは罰せられるのが當然であるが、ローズヴェルトは決して『事實を打明ける者を罪する筈は無い』と言ッた前言を飜さない。シャイデーを保護しやうと思ッたが、シャイデーは、早くも局長に事態を話して、自分は辭表を提出したが、ローズヴェルトは、其の言を守りて、大學で同窓のトムソン氏と謀ッて、シャイデーを民勢調査局の一役員となして保護した。

シャイデーといふ郵便局の書記に集まッて居るのに氣付いた。シャイデーは、其の地方の警察の一委員で、選擧者の名簿も彼の支配下にあッたのである。ローズヴェルトは、早速シャイデーを招いて眞相を知らむとした。初めの程は、シャイデーは多く語らず、互に無意義な會話を交換して居たが、ローズヴェルトは彼より尙ほ大に聞く可きものがあると信じて、言葉を緩和げて、『君は政府の吏員であれば、必ず政府の中心の目的の爲めに大に働くでせう。で、私は今政府の爲めに此の眞相が知りたい。どうか事實を秘さずに話して下さい。』

すると、シャイデーは、『私は健康も勝れず、且つ貧乏ですから、事實は話しません。話すと直に免職されますから。』

『それは御心配なさるな。事實を打明ける者を罪する筈はない。余は誓ッて、政府をして政府の爲めに眞を告げる君を保護させる。』

で、將來の大なる改善を計ることの可否である。乃ちローズヴェルトは衆論を顧みず、右の方法を以て、盛んに奸商を捕縛させた。大なる善の爲めに一時小なる善を犧牲にしたのである。

ローズヴェルトが政務委員であッた時も、小善を大善の爲めに捨てた例が少なくない。それは或る時、ワシントンの一新聞が、逐號政府反對論を掲げた中に、ローズヴェルトは職俸分捕屋であッて、無能な無賴漢に多くの榮職を與へて居ると攻撃した。ローズヴェルトは之を見ると『そんな無賴漢が居るなら淘汰する』と言ッて、職責を盡し得ぬ徒を探し出した。當時ローズヴェルトが種々な酷評に責められた話は澤山あるが、其の中の一ッは、ローズヴェルトが、ミルウォーキー郵便局を探索して、同地方に於ける選擧上の大詐僞、大狡猾を改めた事に關してである。ローズヴェルトは、ミルウォーキーに行ッて間もなく、其の詐僞狡猾は

制を嚴行するには、密賣人を現行犯で捕へて、容赦なく牢獄に繫ぎ、以て他の密賣人を懲らすより他に道は無いが、偖密賣人を發見するには、成年者を使用ッては、忽ち酒屋の方が探偵だと悟るし、少年を用ゐても初めての者ならば、大抵は間諜だと思ッて斷わる。殘ッて居る唯一の方法は、是れまでの得意たる少年醉客を教唆して酒屋に行かしめ、其の現場に奸商を捕縛することである。

ところが同じ警務委員で、之に反對する一人が叫ぶには、ローズヴェルトの言ふが如き方法を以てするは、自ら行はしめんとする禁制を、自ら破るに等しいではないか。かゝる方法は、酒店を滅ぼすと同時に、自家を滅ぼすものである、愚の極であると。一應道理ある反對である。然し、是れは實際を忘れた議論である。要するに問題は、少年を教唆して酒屋に出入させるの可否でなくて、少年を犧牲とする此の方法を、三五回忍ん

據を得むとして取ッた方針には賛成しなかッたであらうが、殊にローズヴェルトが取ッた方法などは不贊成であッたらうが。ローズヴェルトは大多數の善の爲めに少數の善を犧牲にしたのである。抑も當時、兒童の酒に溺るゝ者頗る多く、紐育監獄の罪人の半は、皆未丁年の時、飲酒に耽ッた輩で、かゝる輩は、單に罪人となるのみならず、多くは飲酒が種々の悲慘不幸に陷る源となッて、絶えず悲劇を演ずるのである。又斯ういふ話がある、或る會社の給仕小僧は、役員から飲酒の惡習を得て、連日泥醉したが、或る日、飲み過ごして感覺を失ッて、室内に熟睡したまゝ遂に鼠の爲めに食ひ殺された。かゝる悲慘を見聞したことゝ、貧民街の眞面目なる人が、頻に日曜日泥醉漢の亂暴を訴へる事とに由ッて、ローズヴェルトの決心は愈々固くなッて、如何なる困難を排しても、又多少の犧牲は忍んでも、必ず斷行しやうといふことになッたのである、此の禁

ばかりだと主張した。然し、ローズヴェルトはかゝる反對に耳を傾けぬ。實際ローズヴェルトの改革以來、風習は舊に歸らなかッたのである。

隨分其の頃は立派な市民までが、かゝる禁制は實際行はれぬ性質のものだ、と信じて居たが、ローズヴェルトは、其の迷妄を打破した。勿論ローズヴェルトとても、器械を働かす樣に甘く實行出來たとは謂へぬが、少くとも未曾有の好結果を示したのは事實である。そして如何なる改革でも、之を斷行するには膽力があッて、世論の上に超然たる程の自信と精力とを具へた者が首腦部に居れば行はれる事を示した。ローズヴェルトは、此の禁令嚴行が詐僞窃盜を取り締るにも勝して、市の安寧の上に効ある事を明かにし、紐育市を從前よりも一層安全に、一層平和にして、後任者に讓ッたのである。

紐育の正義な市民は、從來警察が、日曜禁制を破る酒店から充分の證

た場合には、大抵其の儘に打遣ッて置くのが習慣であるが、ローズヴェルトは然うでない。法令はすべて、之を施行するか、廢止するか、の二途の一を斷然擇る。

當時生中に行はれた酒店の日曜禁制は、其の實表面だけのことで、密賣は公然の秘密であッた。そして、其の罰金は一種市の收入と見做されて居たので、酒店の多くは、巧に賄賂を使用し、或は投票權を利用して、側口から密賣を行ッた。罰せられたるは、正直者か貧乏店で、賄賂を使ふことの出來ないものばかりといふ始末であッた。

此の狀態から見ても、之を嚴重に禁制するといふのは、實に斷然たる處置と謂はねばならぬ。勿論、警察部內にも、酒屋の賄賂や投票權を利用する腐敗漢が居る。彼等はローズヴェルトに反對して、紐育の如き都會に斯樣な改革を實行しても、風習は何時しか舊に復ッて、徒勞に歸する

の姿の室外に消えるまで睨みつめて居た。

やがて、ローズヴェルトは余の方に振りかへッたが、微笑して、

『君は丁度好い時に來て呉れた。余は今彼奴を叱るのを君に聽かせたかッたのだ』と言ッて、そして何か面白い事を言はうとして言葉に窮した時に何時もするローズヴェルトの例の假聲で『叱るのを君に聽かせて君を悦ばせる爲めではなくて、彼奴を君の面前で酷く叱りつけて、充分赤耻をかゝせて遣りたかッたのだ』

ローズヴェルトが紐育の警務委員となッて初めて企てたのは、日曜日に酒屋の店を閉ぢさせる事であッた。ローズヴェルトが此の禁制を企てたのは、必ずしも安息日を守らせるといふやうな意味ではなくて、只其のことが法律として現に存し、自分が警務委員たる以上、飽くまでも之を施行せねばならぬとの理由からである。一般に、一の法令に飽き

に賣ッた老朽船は、一週間持てば可いと思ふか。沈沒しさうな船を賣ッて、それで合衆國の爲めに竭さうとする愛國心かさういふ愛國心で毎日斯んな申込みをするのか。』

『然し、それは船主が……』と、法律家が何か言はうとすると、ローズヴェルトは一層激して『君の樣な法律家を持ッて居る船主こそ幸だ。どんな頁くない事でも皆君に委せて成功させる。君も嘸かし得意だらう。いやいやもうあのやうな古桶(老朽船を云ふ)は要らぬ。昨日購ッた船などは、敵港の閉塞より外には使用へない。今に航海中に沈沒して、可惜勇士が溺死したらどうする。此の國に居て古桶を政府に賣るやうな奴を助けて、勇士を藻屑にしたらどうする。』

此の時の法律家の樣子こそ實にみじめなものであッた。で、頭を垂れてそこ〳〵に辭し去ッたが、ローズヴェルトの赫と見開いた雙眼は、彼

仕事だから、右様の手段は取らうと思ッても取られぬ。

丁度其の頃の事、余は一日ローズヴェルトを訪うて、突然其の居室に入ッて行ッた。ところが、一訪問者と談話中であッたので、余は遠慮して退かうとした。すると、ローズヴェルトは『待ッて呉れ給へ、今丁度君を欲して居た所だ』と言ッて、余を止めて、直にまた客の方へ向き直ッた。

余は其の客を一瞥して、或る有名な法律家で、嘗て前海軍大臣在任の當時、海軍省中に一要職を占めて居た人であることを知ッた。ローズヴェルトの顔の筋肉は強く引締ッて、非常の激怒が態度に表はれて居た。例の恐ろしい眼鏡は鋭く輝ッて、怒氣が其の裡から漏れる度に異様な凄さが増す。そして右の拳を固く握ッて、宛で敵の頬でも撲つ様に左の掌を叩きながら、其の法律家を睨んで言ふには、

『君は此處へ來て、昨日と同様なことを言ふのを恥とは思はぬか。政府

を全く己が掌中のものと思ッて、非常な高價の申込みをする。而も將に廢滅しさうな老朽船まで賣り込まうと力める。そして出放題なことを言ッて當局者を飜弄する。ローズヴェルトも、勿論此の邊のことを知ッて居た。

然し、給炭船は什麼しても要る。要るものはどんな高價をも拂はねばならぬ。殊には購入を急ぐ必要がある。遂にローズヴェルトは已むを得ず船主の申込んだ價格で船を買ひ入れた。眼中私利の外、何物も無い船主は、思ひ通りに暴利を得たのである。

斯んな場合に新聞を利用して、愛國心の無い船主を攻擊し、そして申込んだ船の實質や價額を詳細に發表したならば、社會は大に船主を惡むに違ひなく、輿論の聲は貪慾なる船主を畏怖せしめて、船價を半減させるに至るでもあらうが、事が戰爭の準備といふ極めて秘密を要する

めて『最善の努力』を爲したのである。當時世間では、ローズヴェルトが何故に不賛成の議員を淘汰して、速に完全なる條約を結ばなかつたか、と議した。是れは勿論、條約の調印を急ぐには良策であつたに違ひ無からうが、然し、卑怯な所業である。ローズヴェルトは之を爲すに忍びぬ。ローズヴェルトが事を爲すには、常に事自らが開展し行く自然の道に從つて進む。そして能ふ限り「最善の努力」を爲して滿足する。彼は豫言者や聖者やが口を極めて説く高い理想を、其の儘に實現させやうとする樣な、空な妄想に支配されぬ。彼は唯自己の信ずる『大なる善』に對つて、斷えず能ふ限りの「最善の努力」を爲すのである。即ち彼の生涯は『最善なる努力の生涯』である。

ローズヴェルトが海軍次官であつた時、彼の務めの一つは、西班牙との戰爭の準備として、給炭船を購ふ事であつた。斯かる時に、船主は政府

て、少しく語氣を强めて、最早玖馬との條約により、甜菜砂糖も甘蔗砂糖も、關税の全く同じき由を告げた。するとオクスナルドは、自己の商賣に少なからぬ影響があると思ッたか、『では大統領閣下は、この關税に差があッては不可いのですか』と言ッた。すると、大統領は、『此の事に就いては、屢々言ッた通り、私自身には一向利害は無い。只米國が玖馬に對して能く正義を守らねばならぬといふ點から、此の先何處までも主張を全うするまで闘はねばならぬ』と答へた。

其の後二度まで國會は右に關する條約を承認しなかッたが、ローズヴェルトは、心に正義と感じ善と考へたる事は、飽くまでも遂行しやうと力めるので、元老院に提出して、漸く承認せしめた。そこで早速非常な困難も顧みず、國會を召集して、竟に全く條約に調印するに至ッた。

ローズヴェルトが茲まで奮闘したのは、飽くまでも議員の是認を求

責任で無いので、初めに此の提案は議員の一笑に附せられて、誰も顧みなかッたが、ローズヴェルトは更に之を特別議事に附した。其の理由の第一には、玖馬と友誼の平等なるべきを主張し、第二には玖馬の爲めに正義を重んじ、玖馬が米國に表したる好意に酬ひん爲め、必ず關税を減ぜざる可からざるを主張したけれども是にも一向反響はなかッた。然し、ローズヴェルトは、尚ほ撓まず、重ねて第二回の特別議事に附したが、やはり一向に顧みられぬ。如何ともすることが出來ぬ。是に於て結果を求めて止まざるローズヴェルトは、此の上は已むを得ずと、玖馬と商議して獨斷遂に關税を減じてしまッた。丁度其の折の事であッたが、西北地方で甜菜砂糖の豪商ヘンリー・オクスナルドが「大統領官邸」に來て、玖馬から輸入されつゝある甘蔗砂糖の狀況を知らむとした。其の時、余もローズヴェルトと同室に居たが、ローズヴェルトは、オクスナルドに向ッ

て、朝三暮四な日々の新聞の是非などには餘りに意を留めぬ。そしてローズヴェルトは、かの事己の理想通りにならねば、一擲して顧みざる政治家とは根柢から違ッて居て、假令理想通りに實現されずとも、『最善の努力』を竭して、一歩でも理想に近づけば、それを歡んで神に感謝する尊い政治家である。

ローズヴェルト大統領が、就任後初めての議會に、第一に提議したのは、米國に輸入する玖馬の物產に賦課する關稅を減ずる事であッた。若し普通の大統領であッたならば、是れ位の事は只提議したといふのみに止めて、たとひ成功しなくとも、それは議會が通過しないに由るのだと、罪を議員の頑迷に歸して、唯自己のみ正義の提案をしたと誇ッたかも知れぬが、ローズヴェルトは然うでない。ローズヴェルトは結果を欲するのである。成功しない理由を議員の頑迷に歸して、安んずる程に無

『大なる善』と『最善の努力』

玖馬島產物の關稅問題――海軍省の給炭船購入――叱られたる法律家――紐育酒店の密賣事件――シャイデー――惡漢との約束

ローズヴェルトは大體の主義方針だけ立てゝ政務を處理するのである、些事に至ッては皆臨機應變の處置を以てする。其の人物を撰むにも、能の現はるゝに從ッて採用するので、彼が平常口にする言葉に、『我等の車は星までも進めざる可からず、されども同時に人間は地より足を離す能はざることを記憶せよ。我等の政事は他人と常に一致せざる可からず。』と云ふのがある。是は思ふにローズヴェルトが、常に其の所謂『大なる善』即ち大多數の爲めの便利に着目し、無暗と型に嵌めた樣な主義とか主張とかいふ頑固を避けて、社會の大部分の善を計ることを念として居るからであらう。ローズヴェルトは、又最終最後の勝利を主とし

エルトの敵に對する態度が判らう。

に就いて言はぬが、苟も紐育市を安寧ならしめむと欲せば、警察官のみならず、大に裁判官の協力を望まねばならぬ、と言ッた。

公平なる評家は、ローズヴェルトが敵に對して論爭する時、屢々『其は虛言なり』『誤解なり』、乃至は『破廉恥漢』とまで言ふと傳へる。然り、ローズヴェルトは實に屢々斯かることを言ふ。是れ即ちローズヴェルトが何處までも自己の正當と認める所を貫かむとするからである。そしてこの嚴酷が、却ッて敵と論爭するに當りて相互の見地を明瞭にする。

嘗てローズヴェルトが文官試驗委員であッた時に、公會の席で、或大臣の不德を鳴らした。無論其の大臣も居る前で、其の時、席に居合はせた余の友人が、後余の許に來て氣の毒さうに言ふには『ローズヴェルトは禮を辨へぬ。あのやうな高官の人を、衆人の面前で罵るなどとは。殊に其の罪惡の證據まで並べ立てゝ…………』と。此の一事でも、ローズヴ

新聞紙のみならず、警察の事に關しては、裁判官まで叱られたことがある。嘗てコイング判事が、或る席上で、近來紐育市中に罪人の増加したのは、警務の弛緩に因る云々と演説したのを、ローズヴェルトが聞くや否や、直ちに之を辯駁して『コイング判事の言は誤ッて居る。全體より見れば、罪人は減じて居る。且つ罪人を減ずることには判事も大なる責任がある。判事は犯罪に應じて嚴格なる判決を下さねばならぬのを、動もすれば漫りに刑を輕減するので、多くの罪人は直に獄を出て來る。警官の勞力は實に其の爲め二重にせらるゝのである。漫りに刑を輕減する判決とは、過去六週間に於けるコイング判事のそれである。捕縛して法廷に送られた罪人は、大抵竊盜、夜賊、恐喝等の犯罪であるに係はらず、同判事は多くこれを無罪としたではないか。これが爲めに、多數の警官は再び苦心と勞力とを重ねねばならぬ。余は强ちコイング判事一人のみ

で附け加へた。
辯明は尚ほ是れに止まらずして、五十日以前の警務と、其の以後の警務との成績を比較したる統計表を示し、從前に比して重罪の數は一割六分を減じ、犯人の縛に就く者は一割五分の增加であることをも明かにした。そして尚ほ論鋒を鋭く新聞記者に向け、マコウレイがメモイアの一節『彼の輩には嫌忌の念と嘲罵の念とが不思議な調和をなして居る。彼の輩は些細の事を口喧ましく議論し、其の些細な事が無くなると、虛言まで書きたてる。嗚呼、熱帶に行かずして雷雨の凄まじきを知り得るか。ナイアガラの瀑布を見ずして、大瀑流を思ひ浮べ得るか。バレルがメモイアを讀まざる者、誰か虛言の慘毒を知り得やう。………吾人は今此の虛言者を罰し得るとするも、虛言の慘毒は容易に免れぬではないか。』を引き來ッて痛論した。

手放さず、遂に能く其の腐敗、懶惰、不秩序を匡正した。ローズヴェルトの方法は、多少小説的だ。然し、一度自己の眼底に映じたものに對して事を爲すは、他人から聞いて爲すよりは、一層正確で、一層運びが早いのである。

尙ほ一ツ話す事がある。ローズヴェルトが警務委員であッた時に、紐育の一新聞が、『最近五十日間の重もなる窃盜及び夜盜』と題する記事を掲げて、警察の無能を攻擊した。從來紐育の官省では、新聞紙上の斯かる記事をば概して等閑視し、或は無意義の罵詈だとして默殺して居るのが通例であッたが、ローズヴェルトは決して見逃さぬ。直ちに他の有力なる新聞紙を借りて、一々精細な辯明をなし、警務の概略を說き、併せて現在の盜難が、四十四件ある中、搜索し得ざるは僅に四件であることま

巡査はこそ〳〵と去ッた。殘ッた警視官は、
『今あの巡査によく巡廻しろと諭しました所です。』
『左樣か。兎に角君は今朝九時半に本部へ出頭しなさい。』
斯ういふ調子で日の出るまで歩いたが、明るくなッて後は、もう空の交番も見えなかッたので、ローズヴェルトは少々失望した。やがて出頭を命せられた巡査や警視官やは、恐る懼る本部へ出て行ッたが、案外叱られずに濟んだ。或る者は、今朝だけ一寸用事があッて出勤出來なかッたと言ッた。
『今後は愼み給へ。私もまた折々散歩して見るから』とローズヴェルトは笑ひながら諭した。
是れ即ち短劍を以て直ちに他の心臟を刺す一例ではないか。斯うしてローズヴェルトは、全く警察部内の宿弊を根絶するまで、此の短劍を

ローズヴェルトは、其處を去って、警視官に會って警務の弛緩を質さうとすると、丁度警視官は、隣の交番の巡査を二人まで呼び寄せて、世間話をして居るといふ有樣。

『誰が此の交番を受け持って居るのですか』とローズヴェルトは巡査に對って問うた。三人は不思議な顔をして、ローズヴェルトを凝視めた。中の一人は『一體お前は何だ』と詰った。

ローズヴェルトは、それには頓着せず『此の三十一番の交番の受持は誰ですか』と問ひかへす。

三人は愈々怪訝な顔をして、瓦斯燈の光で、ローズヴェルトを見守ったが、警視官は其の誰なるかを認め得たと見え、二人の巡査に目くばせした後、極めて鄭重に、

『私であります。』

ッて居るので………坐ッては居なかッたのです。』

『可し、可し』と言ッて不思議の人は去りかけた去るのを追ひかけて、巡査は頻りと、坐ッては居らず、一寸待つ間、物に凭ッて居たと辯明する。

『可し、可し。君は私に何故ついて來る。交番に居なさい。そして今日の九時半に本部へ出頭するやうに。私は警務委員のローズヴェルトだ。』

丁度此の時、又二三人散歩しながら來て、巡査と女とに雜談をし始めた。巡査の目くばせで、女と一人の男は何處へか隱れたが、尙ほ二人ばかり殘ッて、盛んに巡査に話しかける。巡査は更に言ひ譯した。

『此の人達は少し………その………醉ッて居ますから、今鎭めやうと思ひまして。大變にどうも。』

『もう可い。今日午前九時半に本部へ出頭しなさい。』

翌朝其の人が約束の所へ行ッて見ると、ローズヴェルトは杖と巡査交番所の圖とを持ッて待ッて居た。そして倶に歩み出した。散歩の間、三ッの交番を經たが、巡査の居たのは一ッに過ぎぬ。やがて、第二通路に來て見ると、或る交番で巡査が女と坐ッて居た。

『君、君は二十七番の交番を受け持ッて居るのか？』と、ローズヴェルトは突然巡査に訊ねた。

巡査は驚いて立ッた。誰か判らぬが警察の事情に通じた者が來た、と思ッて口籠りながら『さ、左樣です。』

『坐ッて居てもよいですか？』

不思議な人間が不思議な問を發するものだから、巡査は愈々怪訝な顏をして、

『いーえ。私は今坐ッては居なかッたです。今次の番の人が來るまで待

ローズヴェルトの好む格言は昔の海賊が短劔について言った『敵に近づくに從ひ、刄は長くなる』といふ語である。即ちローズヴェルトの劍は短かくても、充分敵に接觸して、單刀直入、過たず心臟を貫くといふ主義だ。嘗て彼が紐育の警察を改革せむとした時、彼に親切なる友人等は、皆忠告して言ふやう、今まで多くの人が用意周到に此の改革を斷行せむとしたのだが、警察全體が、猜忌、依怙、脅嚇、賄賂で、蜂の窠の樣になッ居るから、手を下す道がない、迚も成功するものでないと。

『斷行する』とローズヴェルトは明言した。そして其の言を實にした。或る日の夕暮、ローズヴェルトは、例の忠告をした友人の一人を招き、翌朝早く東市街を散歩しやうと言ッた。

『朝早くとは！』と友人が問ふと、

『午前二時半、四十二番街の第三通路(アベニュ)で會ひませう。』

過に反對したで、ローズヴェルトも兩院に對して、萬一此の新條令にして妄濫だとすれば、勿論止めねばならぬのみならず、新省も設けるに及ばぬとまで言ッた。そして兎も角も、新設省の官吏は先づ内務大臣の指名によッて今までの民勢調査委員から採り、後日更に人員が必要な時には、登用試驗に依るといふことになッた。調査委員は何れも先づ思ひ通りになッたと悦んだ。

ローズヴェルト大統領は、此の機を見て、一刻も猶豫せず、内務大臣に新條令の精神通りに指名させることにして、調印を了らせた。實は内務大臣は全く大統領の贊成者であッたので、大統領は甘くやッたと思ッた。民勢調査委員は、何れも大統領に謀られて居たのである。終局、向ふ四ヶ月の間に、在來の調査員を若干名と限り、其の他は登用試驗に依るやうになッた。

不圖ミラーに邂逅した時、ローズヴェルトは愉快らしくミラーの肩を叩いて『ミラー君よ、時は何物をも平等にする』と言った。ミラーはローズヴェルトほど磊落でなかったが、ローズヴェルトは最早過去を忘れてミラーと和解したのである。

一千九百二年(ローズヴェルトは既に大統領である)の春、國會は大統領の提議によりて、民勢調査の一省を特設することゝなった。此の時にローズヴェルトの取った手段がある。丁度其の頃まで官吏の登用は、多く競爭試驗に依ってせずして、年功で昇任するといふ風であったので、時の民勢調査委員は、何れも新設の省に入るに年功に依るべきを主張した。此の年功に依るといふ保護計畫は、勿論登用試驗を經た者に對して甚だ不公平な制度である。

が、上院と下院とは、何れも民勢調査委員の方に同情して、新條令の通

踏せぬ。一千八百八十四年は、紐育アチカの共和黨會合で、ローズヴェルトがアチカに出陣するまでには、既に郷里で、老猾なる政客ゼーク・ヘスと闘ッた。當時ゼーク・ヘスは、其の地に少からぬ勢力を有ッて居て、頻りにローズヴェルトが白面書生の身を以て、老練なる政治家と爭ふを嘲罵した。が、ローズヴェルトは例の公明な態度で易々と勝を制した。

アチカに來て後、彼は上院議員ワルナー・ミラーと競爭した。時にはミラーと劍まで交へた位であッた。アチカに於てローズヴェルトの一味は、ミラー黨の七分の一に過ぎなかッたが、ローズヴェルトの敏速と慧眼とは、優に敵と對抗し得た。遂にミラーは敗北して、僅にアルバニー地方で、ローズヴェルト反對の運動をして居たに反し、ローズヴェルトはシカゴに奮闘して首尾よく國會に出た。後アチカの或る旅館の廊下で、

此の時代のことであるが、ローズヴェルトが、大學拳闘家として、或る拳闘會で闘ッて居る眞最中に、突然審判者が『止れ（タイム）』と呼んだ。ローズヴェルトは直に腕を垂れて審判者の命に應じたが、敵は止めずに、ローズヴェルトの鼻の上に悽まじい鐵拳を下した。忽ち血が迸ッてローズヴェルトの顔は紅に染まり、觀者は擧ッて敵の不法を惡んで、『卑怯』『卑怯』と叫んだが、ローズヴェルトは、猶豫もなく手を振ッて公衆を制し、『止めよ。彼は審判者の命を聞き得なかッたのである』と言ひ、直に敵と握手して、其の卑怯でなくて偶然の過であッたことを示した。

若い時分の是等の事が、實に後年政界に立ッて目覺ましい奮闘的活動をなす源となッたのではあるまいか。彼が此の態度こそ、實に彼が成功した所以と誰も領くのである。然り、彼は常に能ふだけ平和を望んで居るが、戰ふの必要來り、戰を敵から求められる時は、決して躲避せぬ、躊

も彼の趣味ではなかッた。競爭の趣味、奮鬪の愉快は、唯戰ふのが面白いといふだけである。『强き者をして勝たしめよ』われ弱ければ弱きだけの位置を占めて滿足するといふのであッた。

大學時代には常に「拳鬪」を得意として居ッた。彼が同窓の友は今も語ッて居るが、ローズヴェルトが「手套(グローブ)」を嵌(は)めて「拳鬪」をやるのは、實に巧妙であッた。身體が先天的に頑强といふ方ではなく、體量も輕く、殊に强度の近眼であるといふ大弱點を有ッて居ながら、よく勝を制して居ッた。「拳鬪」に近眼は實に最も不利益であッたが、彼は眼鏡を頭に縛り附けて奮鬪した。運惡く敵の拳でも中ッて眼鏡が粉碎されたら最後、忽ち盲目となる危險も、彼は顧みなかッた。彼が「拳鬪」の祕訣は、屢々自分の弱所を敵に向け、敵が撲たむと思案する刹那、直に我より進んで敵を撲つのであッた。

奮鬪

腕力及び熟練を鬪はす趣味——敵として寛大——民勢調査委員の落膽——警察の改革——新聞紙との論戰。

ローズヴェルトの奮鬪的生活は、かの大統領再選當時の悽ましい勢を見れば分明る。反對黨を壓服し、競爭者を蹂躪した壯快な政爭渦中の勝利は、誰も熟知して居る。で、玆には稍〻小規模な彼が奮鬪的逸話の二三を語りて、そして又、如何に彼が新聞紙の批評と鬪ッて奮進したかをも示さう。寧ろ斯樣な方面の事が、多く彼の奮鬪的生活を彷彿させるかも知れぬ。

競爭の趣味、奮鬪の愉快は、幼年の時から彼を養ッた。腕力や熟練を要するやうな遊戯のある度毎に、幼いローズヴェルト程、悅んだ者はない。然し、彼は必ずしも敵を苦めやうとはせぬ、敵を仆して勝を叫ぶのは、抑・

大統領ローズヴェルトは尚ほ勝に落ちず、ダニエルは其のやうな罪を余に隠して居たのであらうか、と疑ッて漸く電報を打ッて見ると、愈々ダニエル氏は罪人であッた。彼は全く罪を自白した、懺悔の返電を送ッた。そして生れ變ッて再び世に出る時は、必ず前非を償ふ程の事業を爲すと幾度も誓ッたが、最早おそかッた。ローズヴェルトは甚だ失望した。是れ實にローズヴェルトが友人を過信した唯一の失敗である。

であると告げた。するとローズヴェルトはまた『其の事もダニエルは余に打ち明けた。彼も無邪氣な賭博に耽ッたこともあッた。元來彼の育ッたのは邊鄙な所だから、多少其の地の感化は免れぬ。が、官に在る間は決して賭博はせぬと誓ッた。』

ローズヴェルトは飽くまでもダニエル氏の爲めに辯護をつゞけた。そして殆んど任命の事が定まらむとする時、ダニエルといふ者が窃盗罪で捕縛されたと告げる者があッた。偖はこの窃盗のダニエルと都督とあるべきダニエル氏と同人であらうか。

酷評家は盛にダニエル氏の罪を述べ立てた。流石に大統領も不審に思ッた。すると、罪人ダニエルは有罪と決定されたが、昔日の功績と、且つ窃盗は他人も關係して居るとの事で、罪は少しく減ぜられたと通知する者があッた。

し得ざる任務を承諾する人ではない其の軍人としての性格は、余が熟知して居る。都督として彼を遣るときは、如何なる强賊も忽ち縛に就くだらう』と言った。

『ダニエル氏は餘り豪放磊落過ぎる。彼は文官には全く不適任である。』と或る者は非難した大統領の答は『ダニエル君よりも禮儀ある人の多いことは余も認めた。然し、余の欲するは、禮儀ある紳士ではなく、强盜殺人の徒を芟除するアリゾナ都督である。』

斯樣にして、ベン・ダニエル氏が推される事となって、愈々元老院に諮らうとする折、ダニエル氏は南部の歸化人で無賴漢である、彼が片耳聾なるのは全く喧嘩の故である。彼は醉漢だといふ評判が高くなった。ローズヴェルトは之を聽くと『ダニエル君は、好く飮む、其の事は彼が余に打ち明けた。然し、彼は今は飮まぬ。』又或る者が來て、ダニエル氏は賭博者

身的の士である。是等の士の用ゐられるのは、地方知事、稅關長、郵便局長のごとき、機略も勇氣も要せざる所には稀れで、西部地方の森林處理の如き、冒險的献身的な所に多く用ゐられて居る。

此の武人の友を文官に用ゐるに就いて、一ッ忌はしき悲しき實例がローズヴェルトを落膽せしめたことがある。嘗てアリゾナの都督の任命さるゝ時、夥しく多數の文官が手に手に推薦狀を持ッて「大統領官邸(ホワイトハウス)」に押しかけた。共和黨中敏腕の聞えある知事や、何々選擧に大勢力あッた者や、故マッキンレイの信任を受けたといふ者や、實に雲の如く集まッて來た。アリゾナ都督の地位は、學識よりは、寧ろ常識と忍耐と勇氣とを要するのである。大統領ローズヴェルトは夥しき推薦狀を一瞥したのみで『有難う。然し、余は既に人選をして終(しま)ッた。新任都督の職はベン・ダニエル君に依賴した。ダニエル君には政治的經歷こそ無けれ、自己の爲

れ即ち百千の紹介狀を無にして、ローズヴェルトが自分の知己から人を選ぶ所以である。ローズヴェルトには大に人を見るの明がある。ローズヴェルトは、一度一事業を人に託して成功せしめた時は、必ず他の紹介狀を捨てゝ其の人に一層大なる事業を委託するを常として居る。

『吾輩の聯隊』といふのは、大なるローズヴェルトの知己の團體であつて、是は實にかの驃騎隊の人員に外ならぬ。小ローズヴェルトの集合體である。ローズヴェルトが驃騎隊を組織する時に、中尉は必ずやがて大尉に補し得べき者、少尉は必ず中尉に、軍曹は必ず少尉にと、皆十分の能力ある士のみを選んだ。其の結果、政治界に雄飛するに當つても、是等才能の士は、此方にも融通し得る。政治上特種の企圖ある時、ローズヴェルトは必ず先づ玖馬島に生命を倶にした『吾輩の聯隊』に人なきかと考へる。『吾輩の聯隊』には、實に多くの人材がある。何れも大膽にして、何れも献

こそ實に二人を結んだのであッて、ローズヴェルトは、リー氏の著述に依ッて、リー氏の必ず爲す有るべき人格を讀んだのである。斯くて或る貧民町は移されて、空氣清潔なる公園となり、如何なる貧民街にも巡査を訪はしめて、あらゆる改良の策は講ぜられたので、ワシントンは一層の美を加ふるに至ッた。リー氏は勿論一個の無位無官なる市民として永く榮譽ある可き人であッたが、殖民省の一員として大統領の薦め拒み難く、遂に官省の人となるに至ッた。

以上語ッた三四の例は、ローズヴェルトが交友の一斑を示したるに過ぎぬ。一度でも援助を受けた友人に對しては、成る丈け官職を以て之に酬ひるのであるが、是は必ずしもローズヴェルトが自黨の人ばかり登用する譯では無い。ローズヴェルトが事を成すに當ッては、只其の事の成就を望むのであるから、成る丈け手近に己の信ずる人を求める。是

されて、愈々開戰となると、ヤング少將の旅團の下に驃騎隊が置かれた。端無くも少將が熱病に罹ッたので、ウッド大佐之に代り、ローズヴェルトは驃騎隊長となッて、得意な活動が出來た。そして幸にも戰局を結ぶ前に、ヤング氏は癒えて中將に進み、司令官の一人となッて、大に驃騎の功績を表彰した。

ジエコブ・リー氏は雜誌『太陽』の警察欄記者で、丁度ローズヴェルトが警務委員の當時、盛に警察上の評論を書いて居たが、雜誌記者として日給に甘んずるを屑しとせず、貧民救濟の爲めに、斷然身を挺して收入ある記者を止め、警察と業を俱にする樣になッた。リー氏の著書『過半の蒼生を如何にすべき』といふ貧民救濟策を論じたものが深くローズヴェルトの注意を惹き、遂に一日リー氏の机を『余は君を援けむが爲めに來る』と記した「警務委員ローズヴェルト」の名刺が訪うた。此の突然の訪問

の援助に他ならぬ。

ローズヴェルトが此の驃騎隊の活動は、後の政治界の活動と密接の關係を示して居る。驃騎隊の活動に、ローズヴェルトを援けた者は政界に於て大に酬ひられて居る。ウッド氏が五年ならずして軍政長となッた特例も即ちそれである。千八百八十年、驃騎隊の恩人ウッド氏は、實にローズヴェルト生涯の恩人として忘れられては居ない。

ヤング大將も亦ローズヴェルトにとりては大切な友である。初めて會ッたのは西部地方であッて、ウッド氏とよりも餘程以前の事。其の時既にヤング氏の軍人的性格はローズヴェルトの慕ふ所であッた。米西戰爭開始の前、ワシントンの或る晩餐會の席上で、ローズヴェルトが戰地に行きたいとの希望を語ると、ヤング氏は『若し余が一軍の指揮をすることゝなれば、必ず君を戰鬪に參加せしめる』と約束した。其の言が實現

である。

斯う言へば、何かローズヴェルトがウッド氏を援けたのであつて、ウッド氏がローズヴェルトを助けたのではない様に思はれるかも知れぬが、實際はさうでない。ローズヴェルトは以前から自ら一隊を組織して實戰に參加したいと云ふ熱望を抱いて居つたが、一向戰術に暗いので、誰か然るべき將校をと、血眼になつて居た時、ウッド氏といふ大佐を得るに至つたのである。理想の驃騎隊は、玆に實現された。元來驃騎隊はすべての人員が、ローズヴェルト自身で選んだものであつて、東部地方の牛飼や、西部地方の獵夫などもある。皆ローズヴェルトに心服して居る。故に其の訓練も直に出來、ウッド氏の戰術も直に呑込めた。戰爭中間もなくウッド大佐が少將となつて旅團長に轉じた時は、最早ローズヴェルトは大佐として大に活動するを得たのである。是れ偏にウッド氏

合ッたのは、千八百九十七年から八年にかけて、かの米西戰爭の呼び聲が喧ましかッた時であッた。ローズヴェルトは當時久しく實戰に參加したいと云ふ希望を抱いて居たが、玖馬事件で戰雲愈々穩ならぬに至ッた頃、ウッド氏と相知るを得、其の人格の中に頼もしき光を認めた。二人は幾んど同年輩で、同じく荒い遊戲を好んだ。當時のウッド氏は一軍醫に過ぎなかッたが、常に戰術を研究し、野外戰には多くの趣味を有ッて居て、現に亞米利加土人と交戰の際も、軍醫の身を以てよく一隊を指揮したと傳へられて居る。米西戰爭の開かれんとする時も、逸早く玖馬島を視察して來て、戰場の地勢を熟知して居る。斯樣に萬事ローズヴェルトが欲する通りの軍人であッたから、直に時の大統領マッキンレイ氏に謀りて、ヴッド氏を大佐として我が聯隊の長たらしめなば、自己は其の中佐となッて働くと說いて成功した。それが即ち有名なる『驃騎隊』

ことは毫末もなく、ムレイ氏は全く誘はれたのだと思つて居る。ローズヴェルトが青年の頃、或る勝負事に就いてムレイ氏の秘訣を敎はつた事がある。ローズヴェルトの『政略を敎へた』といふは、是れである。そして當時の此の遊戲事が、やがて友情として一ヶ月續き數年續いた。恐らくは生涯つゞくであらう。斯樣に一寸した友情でも長く忘れず無際限であるのは、聊かローズヴェルトの弱點でもあらうが、此の弱點こそ全くローズヴェルトの愛すべき點ではあるまいか。ローズヴェルトが大統領になるや、早々に浮んだ考は、何かムレイ氏の爲めに好地位を探す事で、直に或る行政上の椅子を與へ、それから間もなくエリス島殖民委員となした、

尚ほ事變の際に、ローズヴェルトの手助となつて、今それに酬ひられつゝあるは、比利賓モロの軍政長ウッド大將である。二人の始めて知り

ふ所から推しても、當時ロッヂ氏が國務卿となるだらうなどといふのは、全く杞憂に過ぎなかッたのである。ローズヴェルトは友の忠告を悦んで受けるが、決斷は自分獨りでする人である。

余が分類の第一に屬するは、即ち舊友、親族、同窓等である。是等の交友には、政治上の難題が起ッた時など、折々訪うて僅かばかりの助力を求める。此の訪問が即ちローズヴェルトの友誼である。そして此の部類にも多くの語るべき友人がある。ムレイ氏の如きも其の一人である。嘗て或る新聞がムレイ氏は黨派を作ッて、文官試驗委員(即ち當時のローズヴェルト)の行動を害せんとすると確報した時、ローズヴェルトは、恐ろしく眉を寄せて『ムレイ君は、始めて余に政略を教へた人である。此の様な馬鹿なことを爲る筈は無いが』と呟きながら、早速其の徒黨に對して痛棒を加へた。然し、ローズヴェルトは個人的にムレイ氏を惡む様な

であつた。

其の他にもロッチ氏と意見が合はなかつた事がある。ローズヴェルトは友人の爲めには雙腕を振つて援助を爲すが、其の主義は、友の爲めに曲げぬ。彼の情は友の前に捧げても、彼の理想は永久に彼のものである。先頃余がローズヴェルトを訪ねた時も、『今度某を免官する事にした。カボット君(ロッヂ氏の事)が午後の間、此處で彼を留任せしむるやう勸めて、彼の過失は全く天災である、彼程の正直者は無いと熱心に説いたが、余は聽き入れなかつた。カボット君は、余を餘り苛酷で、友人の言を容れぬ男と思ふかも知れぬ。又余も彼を非常に氣の毒には思ふのだが、主義は仕方がない。余はカボット君を愛するから、所有物の半ばと雖も彼の爲めなら惜くない。然し、主義は斷行する』とローズヴェルトは話した。

是れが即ちローズヴェルトが最良の親友に對する態度である。斯うい

其れから後は、ローズヴェルトの行動の一半は、必ずロッヂ氏に援けられた。ローズヴェルトが文官試驗委員であッた時も、議會に出て常に文官試驗委員の活動範圍を廣めたのは、ロッヂ氏であッた。食祿者流を斥けるに當ッても常に之が斷行を賛成して、腐敗漢から惡まれたのも、ロッヂ氏で當ッた。又ローズヴェルトが海軍次官たらむとした時も、ロッヂ氏は大統領に謀りて直ちに任命の運びとなッた。斯樣に殆んど異體同心の有樣であるが、然し、折々は意見を異にすることもある。其の一例は、千九百年の政戰の際、ローズヴェルトが副大統領となッた事で、有體に云へば、副大統領の地位は、一個の閑職に過ぎずして、元老の隱退所であッたから、初めローズヴェルトは頗る躊躇した。が、ロッヂ氏の意見は、反對で、副大統領の樣な閑職でも、ローズヴェルトの如き奮闘的人物が行けば、確かに働き甲斐のある地位だと勸めた。實際ロッヂ氏の言ッた通り

讀者に傳へて見やうか。

先づ最初にローズヴェルトの交友を大體二ッの部類に分けることが出來やう。第一は、自然と意氣が投合した朋友で、多くは長く愉快な交際を續けた者。第二は、一朝事變のあッた折り、互に援け合ッて相信ずるに至ッた士であッた。是は稀れである。此の第二に屬する最も親交の友は即ちヘンリー・カボット・ロッヂ氏である。ロッヂ氏とローズヴェルトとはハーヴァード大學で師弟の關係があるから、世人は二人の交誼が此の時に起ッたものと思ッて居るが、事實は全く違ふ。ローズヴェルトはハーヴァード在學中、ロッヂ氏の講義には大反對で、ロッヂ氏が採點法の不公平を鳴らした隨一であッた。彼等二人が親交を始めたのは、まだずッと後の事である。選擧運動の際、意氣相投ずるの機があッて今日に至ッたのである。

位より動かすに忍びぬ。又ロッヂ氏自身も決して國務卿となるを欲せぬ。況んや兩黨が現在の有樣で滿足して居るではないか。』と斷言した。

余はローズヴェルトもロッヂ氏も、共に熟知して居たから、自分の斷言の確なるを信じて居ッたのみならず、當時新大統領ローズヴェルトがロッヂ氏から貰ッた忠告文――ローズヴェルトが始めて得た忠告である――に、故大統領マッキンレイの方針は毫も之を變せず、國務卿ヘイ氏も、其の儘に留任せしむるを可とする旨が述べてあッたことを確かに記憶して居た。思ふに公衆の誤解は、ローズヴェルトは、人を任用するに當りて、個人的親交に重きを置くのではなからうかといふ單純なことであッたらう。事實ローズヴェルトは多く衆人の豫期したことは爲さぬ。大抵の塲合意想外に出る。即ち獨特の人撰法がある。此の獨特の人撰法といふは、勿論詳しく論じ得ることではないが、其の概略だけでも

友誼

保守黨の杞憂——上院議員ロッヂ氏とローズヴェルト——其の他の益友——『吾輩の聯隊』——情義と信用——ベン・ダニエル。

マッキンレイ氏が殺された當日、衆口に上ッた噂はローズヴェルト內閣では、ロッヂ氏が國務卿になりはすまいか』と云ふ事であッた。ロッヂ氏が國務卿となるのは、保守黨の大恐慌で、輿論は又、ロッヂ氏にして一度その椅子を占めたならば、外交は頗る侵略的に變じて、數年を出でずして英獨の一ッと戰ひ、領域を廣めることと信じて居た。余が世論に對して、ロッヂ氏は決して國務卿とならざる可きを論破した時も、聽者は等しく疑を發して、『閣議は常にロッヂ氏を推すに、何故君は氏が國務卿とならざるを言ふか』と詰り、證據を求めたから、余は『諸君は二ッの事實から信じ給へ。第一、ローズヴェルト氏は決してロッヂ氏を現在の地

段まで教へた。此の破廉恥漢は二年の禁錮と判決されたが、それに服さないで控訴した。

其の友人等も、亦切りと辯護して、此の罪人の過去が、品性があッて社會の上流に立ッて居たとか、禁錮されては妻子が困るとか、はや既に罪を懺悔したとか、言ひ立てたが、いつも取り上げられなかッたが、此の罪人中々根氣強く控訴したので、遂に千九百四年ローズヴェルトが選擧運動でワシントンに不在の時、運よくも無罪の宣告を受けるに至ッた。やがて大統領が歸ッて此の判決文を讀んだ時の不機嫌さ。一通り目を通すや、忽ち切歯して、ペン尖が折れる程墨汁壺に突込んで、判決文の終りに次の如く書きつけた。

『余が不在中にて、此の罪人の罪を一層重くする能はざりしは痛恨の極である。

セオドーア・ローズヴェルト』

たであらう。聽衆の中にも無論夥だしい猶太人が居た。而も何れも靜肅を守りて、講演を終りまで傾聽した。唯一人自己の席から離れて何か言はうとしたものがあッたが、同じ猶太人に會場外へ連れ出されてしまッた。

講演は最も平和に終ッた。が、失望したのは演說者自身であッたらう。得意の刺戟的な雄辯は一向に引き立たず、そしてワシントンのみならず、到る處でアルワルト博士の演說は不成功に終ッてしまッた。

今一ッローズヴェルトの感情に關する事件を紹介して、本章を終るとしやう。

西部地方の一紳士で(紳士と云ッても外觀ばかりであるが)財產も家庭も地位も上流な人であッたが、あらう事か、一少女を辱かしめた。まだ年齒もゆかぬ無邪氣な者を穢したのみか、惡智慧をつけて罪を匿す手

『猶太人諸君。余は諸君に最も名譽ある一事を依賴せんとする。最も名譽ある一事とは敵の保護である。北米合衆國の首都の演壇に、宗教の自由を保證する一職務である。諸君は既にアルワルト博士の何人なるかを熟知して居らるゝ筈。今晩の同博士の講演は、全く諸君の保護に委ねる。余は猶太人反對といふが如き事に同情を拂はざること、決して諸君の後に落ちずと雖も、北米合衆國が信仰言論の自由國である以上は、諸君を保護すると同様に、アルワルト博士も保護しなくてはならぬ。今晩北米合衆國の國旗のもとに諸君が最も平和にアルワルト博士の講演を終はらしめたならば、諸君が信敎の自由を重んずる心を示すと同時に、諸君の最も良き誇りとなるを疑はぬ』と說いた。

　其の晩の講演會で、警官の正服を着けた猶太人が、靜かに嚴かに會場を警戒したのを見た。アルワルト博士黨の人々は、そもどんな心地がし

するとローズヴェルトは暫く默して居たが、
『宜しい、心配なさるな。アルワルト博士に特別の保護を與へませう。特別です。』と言ッて、歸してしまッた。
アルワルト博士黨の人達は悅んで歸ッたが、此の時、ローズヴェルトの胸中に成案がある。直に猶太人と親交ある一友人を呼んで、
『お賴みですが、猶太人中から三十名ばかり、身體の丈夫な、信用ある人を擇んで下さい。成る丈け猶太人特有な容貌なのがよいです。そして其の三十名を一隊にして、此處まで伴つれて來て下さい。』と言ッた。
直に猶太人の一隊が、ローズヴェルトの前に現はれた。而も注文通りどの猶太人も皆よく祖先の相貌を傳へた者ばかり、誰も彼も猶太彫刻のモデルになりさうである。ローズヴェルトは、例の大きな眼鏡を徹して一瞥した後、徐に、

來て、得意な猶太人反對演說を試みた折の事で、ローズヴェルトは當時警務委員であッた。

アルワルト博士黨の二三名が、紐育警察署に來て、博士の演說中は、警官を派遣して、猶太人の聽衆が、博士に對し危害を加へない様にと願ッた。するとローズヴェルトは、

『それ程に猶太人を懸念せねばならぬのですか』

『アルワルト博士の辯舌は、折々非常に痛快に趨ることがありますから、猶太人の感情を害して、若しもの騷動がありますまいか………』

『懸念は無用です』とローズヴェルトは斷言し、頁あッて『凡そ在米の猶太人ほど平和なものはありますまい』と言ひ足した。

『左様ですが、アルワルト博士に對する禮でもありますし、特に警察署から、護衛の警官を派遣された方が至當と思ひます。』

から來る誤解である。

『地方裁判所長として、スミス氏は何の點から見ても最も適任でせう』と上院議員の一人が、ローズヴェルトに友人を推薦する。推薦する前、既に幾通かの推擧狀は差出してある。すると、大統領は例に依ッて『同感です。何の點から見てもスミス氏は最も適任でせう』と繰り返す。上院議員は歸る。良ありて大統領は『何の點から見ても』といふことは、必ずしも一の點に秀づるを意味せぬと言ッて、スミスの代りにジョンを叙任する。此の時既に上院議員は、スミス氏の榮轉を披露して、祝杯を擧げて居るので、赫と怒る。そして大統領は一時の感情で意志を枉げると傳へる。然し終局はローズヴェルトの座談の綾に作用されたるに外ならぬ。

茲にローズヴェルトの感情を語る一ッの面白い話がある。それは千八百九十五年に獨逸の有名な猶太人反對者アルワルト博士が米國に

る。ローズヴェルトは『左樣でせう。』『解りました。』等の言を、對手を慰める爲め無意識に發する。そして是が眞面目な賛成と屢〻混ぜられるのである。

此の誤解は又屢〻新聞紙上に現はれる。大統領に云々の決意ありと、麗々しく書きたてると、直に大統領から取消が來る。大統領も正しいのであるが、取り消された記事も虚を傳へたのではない。ローズ・ヴェルトは、かゝる種類の記事を見て、今更の樣に驚く。そして其の言責を負はぬ。

尙ほ之に類した座談の癖は、對手の口吻を其の儘に繰り反すことで、ローズヴェルトは、其の間に早くも可否を考へつゝある。彼は速口で言ふ。例へば對手が『私が今申したのが此の場合の唯一の道で』と言ふと、大統領は『同感です。君の言はれるのが此の場合唯一の道で』と同じ口吻を繰り返す。そこで對手は直に滿足して歸つて新聞紙上に廣める。新聞を見て大統領は驚く、取消す、對手も驚く。是もローズヴェルトが座談の癖

合に、多數の候補者に押し寄せられる煩雜が省ける。又米國の社會では、結婚前に敎會堂で其の結婚に對する故障の有無を公衆に質す「バンス」と云ふ儀式があるが、丁度此の儀式の樣に、ローズヴェルトの豫告が輿論の是非に試みられる事がある。現に余の記憶して居る中で、或る重要の地位に泥醉漢が擧げられやうとして輿論の爲めに舊罪を發かれ、又或る時は南部地方で、黑人を私罰した罪人が、危くも榮官を狙ひかけて失敗した例がある。

又、ローズヴェルトは一時の感情で意志を枉げると傳へる者がある。然し、是等の人の言ふことを細かに分解して見れば、結局（つまり）はローズヴェルトの座談の綾に作用せられたのである。座談の時、ローズヴェルトは、對手が未だ前提を終はらざるに、早くも斷案を看取して之を語るが、それは必ずしも贊成を表するのではない。初對面の客は殊に之を誤解す

ローズヴェルトは何事でも一度決心すると、一刻も速く之を世界に知らしめやうと務める。是れやがて多くの評家がローズヴェルトを以て戯曲的であると言ふ所以であらう。が、余は其の言に同意せぬ。抑も戯曲的に人を驚かす、とは今や事實となッて現はれむとする刹那、突然幕を開くではないか。ローズヴェルトは決して此の意味で演劇じみたことはせぬ。ローズヴェルトは一度事に着手せむとするや、先づ大に之を豫告するのである。それ故にローズヴェルトの活動は、敏速であると同時に豫告が外れて、今年が翌年となり、春と約束したことが秋に延びることもある。しかも敏速は依然として敏速である。

決斷の豫告について尚ほ少し語る必要がある。余の見る所では、此の豫告には、少くとも二種の利益がある。第一は徒らに世論を喧囂ならしめたり、無暗な臆説を釀さしたりせずに濟む。第二には、叙任のやうな塲

た一人をローズヴェルトに紹介する必要があると思ッたからで。
『事件の顛末に通じた人とは』と大統領は一秒時の猶豫なく聞いた。
『カロル・デー・ライト氏です』と明瞭に答へると、ローズヴェルトはまた直に、
『その人は今何處に居るのですか』と質した。余は早速ライト氏の事務所へ行ッて尋ねると、氏はマッサチュセッツ州に居るとの事がわかッた。が、其の前既にライト氏の事務員は、同樣のことを大統領から電報で質されたと聞いた。
再び余が官邸に行ッた時は、既にローズヴェルトがマッサチュセッツのライト氏に打電した後であッた。今更の樣に大統領の敏速に驚いた。而して直にライト氏との交渉でストライキの仲裁が成立したのであッた。

る『即刻實行』は實にローズヴェルトが服膺する格言である。
彼がまだハーヴァード大學に居た頃の事、或る眞夜中に、突然馬の悲鳴が聞えた。厩は學校の近くであったから、悲鳴に驚かされた五六名の學生は、床を蹴って起き、直に着服して驅けつけたが、既に馬の應急手當は濟んだ後であった。それは、若いローズヴェルトが、ずッと前に來て、馬を救けたのである。是れ即ちローズヴェルトの『即刻實行』であって、彼は馬の悲鳴を聞くや否や忽ち肌着の襯衣一枚で、二階の窓から飛び下りた即ち階段を降りて、廣い學校の垣を廻って漸く厩に達する手間を一足飛びに省いたのである。
又千九百二年の夏のこと、余は例の石炭ストライキのことで、ローズヴェルトを官邸に訪うた。それはローズヴェルトの意見は兎に角、かゝる一國の重要問題が生じたのであるによって、此の事件の顚末に通じ

感情

鋭い果斷――馬の悲鳴――座談の癖――石炭問題の仲裁――猶太人問題の演說會――凄まじい判決。

皮相の觀察を爲す輩は、屢々ローズヴェルトを以て單に感情のみに支配されて、虛心平氣の處置が出來ぬ人だと言ふ。淺薄極まる評言である。余が眼に映ずるローズヴェルトは、少くとも常に「健全な鋭い果斷力」を有ッて居る。決して一時の出來心に其の行爲を支配されるやうな人ではない。

ローズヴェルトは、決斷に躊躇せぬ、躊躇せぬので感情的だと言はれるが、彼の果斷には二ッの事實が含まれて居る。第一は、事に臨んで必ずしも信任者の言を深くは用ゐぬ。時には全く彼等の意想外に出ることもある。第二には、彼は幼少の時から時間を空費せぬ習慣に固まッて居

の後、處々に轉寓した時も、日曜には必ず教會の事務を執ることを缺かさなかッた。ワシントンに移ッて後は、ローズヴェルトは「官邸」（ホワイトハウス）から十分間位で達し得る新教會に行き、夫人は聖ジョン寺院に通ッて居る。そして子供達は父と共に行くこともあれば、母に伴はれることもある。

ローズヴェルトが宗教上の儀式を輕んずるは、政治上の虚禮を惡むと異ならぬ。彼の名こそ一教會の名簿に錄されてあるが、彼の信條は極めて自由である。猶太人、新教徒、舊教徒、すべて區別せぬ。彼は禮拜を採らずして精神を採ッて居る。彼は徒らに神を呼んで實際の事を忽せにする者に同情せぬ。彼が躬ら信者と言ふは、自ら共和黨員と言ふ意味と同じく、彼の信條はあらゆる宗教を包括して、儀式上よりも道德上の各特長を吸收するといふクリスチャンである。



ロオズヴェルト氏の家庭

て居る。しかも彼は此の損を投機などで埋めやうとは夢にも想はぬ。彼が投機をする位なら、其の賭博禁制は成功した筈は無い。彼が公人として奮闘した生涯は、其の目的の公明なると同時に、一點の穢い雲翳が無い。是れ實に米國の政爭渦中にありて、二十年間世人の注目を集め、敵をして此の點について一毫の非難も加へさせぬローズヴェルトの偉大なる所以ではないか。

ローズヴェルトの家計は、時に困難であッた事もあらう。然し、彼の家庭は一向家計などに心配せぬ。家族は華奢ならぬ限りに立派な服裝、立派な食事をして、上品に暮らし來ッた。ローズヴェルトの家計の方針は、必要の起ッた時に、成る丈け立派なものを調へて置くといふので「官邸」に移ッて後も此の方針は一貫して居る。

教會員としてのローズヴェルトは、監督派の新教徒として育ッた。結婚

思ひ掛けない時に、隣人が午餐に招待されることがある。是は大統領が公務以外に少時の閑話がして見たいと突然思ひ立ッた折だ。又内閣會議のある日などは、毎日大統領の午餐には一人か二人の大臣が屹度居る。

南北戰爭で「官邸」が少しく世と隔たッて以來、今日程自由に開放された事は無い。若しローズヴェルトにして此の政治的意味を含まぬ會合を催ほすことを好まなかッたならば、彼の今日あるは聊か疑はしい。何故ならば、彼には資産が無いからだ。ローズヴェルトの資産は只父から讓ッて貰ッただけである。父は多少の財産が有ッたにしろ、五人の子供に分ッた遺産は多額では無かッた。

セオドーア・ローズヴェルトは、即ち此の小さな資産から出發したのだ。彼は決して蓄財主義でない。彼が企てた事業は何れも彼に損をさせ

れは、貴族政治のことではないか、社會の公益を計るものは、其の公益の爲めに自己を忘れる。自己を忘れて品位を思はざるこそ、實にすべての善事の源ではないか。

大晩餐會とか、國賓の歡迎會とかは、大統領たるに由ッて其の模樣も異なるから、概して言ふことは出來ぬが、ローズヴェルト一家が此の官邸に移ッてからは、少なくとも從來より一層其處に興味を添へた事は明かである。冬は定期に音樂會を開き、夏は綠の芝生に園遊會を催ほすなど、皆ローズヴェルト一家によッて始められた。すべて此の一家は無邪氣開放主義であるから、禮儀作法等は搆はない。通常の晩餐會は、五六名の友人と食卓を同じうして談ずるのである。

午餐は一層簡單である。朝訪問して客の話が濟まない時には、直に客膳が一ッ增されて、午後一時頃、愉快なる會食となる。ときにはまた全く

して一般公衆も、恰も「官邸」を集會所の如く心得て集まる。其處には所謂「社交」などいふことなく、苟も能ある者は、男女を限らず、總て「官邸」の歡迎する客である。今日は小さき演壇に立ッて幼き聽衆に說法して、側なる倶樂部の集合と競ッた說敎師が來れば、明日は勞働者使用に公平なるのみならず、良き主義の下に勞働の部員を有する支配人が招かれ、次の日には有名なる音樂家、又は先人未踏の地を調査した探險家が歡迎され、又次の日には一代の思潮を劃した文學者が招待されるといふ次第である。即ち大統領の共和的圓卓には、あらゆる種類の人物が集まり來る。ローズヴェルトに對する酷評家も、是には默せざるを得ぬ。尤も時に彼等は言ふ、苟も米國第一流の建築「官邸（ホワイトハウス）」を、かくも諸人の集合所として、食卓を汚さしむるは、大統領の品位に係はらずやと。此の言を爲す者、畢竟するに、是れ共和の意義を忘却せる輩である。漫に品位々々といふ、そ

又ヲイスター・ベーに於て、青年の爲めになしたるローズヴェルトの演說は、尙ほ一層ローズヴェルトの面目を表はして居る。曰く『人生の活動奮闘に從ふ强健勇往なる青年諸君よ。諸君が善を爲すと惡を爲すと、共に甚だしく社會に影響を及ぼすなり。諸君若し言語を謹まず、行爲に放漫ならむには、如何にして諸君の自重は保ち得可き。苟も公明正大なる生涯を送らむとする者にして、若し其の言行不潔不正ならば、到底希望を達する能はず』斯かる大統領を有する亞米利加人は幸福なる哉。ローズヴェルトにあッては、生涯の淸淨、精神の公明は、單なる詩的理想ではない。大統領自らが能くこれを體現して、人たるの眞價値を示して居るのである。

米國歷史ありて以來、現時の大統領ほど官邸(ホワイトハウス)に類のない家庭を有ッたものは無い。大統領ローズヴェルトも同夫人も等しく客を愛する。そ

戟する分子は含んで居ない。此の論は確かに道德上の考であって、自然の法則を破って人生の幸福を毀損せむとする利己主義に痛棒を加へたものである。

尙ほローズヴェルトの性行の一特質を示すものとして、逸すべからざる事がある。それは千九百〇二年の三月、軍人に下した諭告で、彼等軍人の亂醉、淫逸を戒めたのであるが『軍隊中にあっては、上官は部下を率ゐるに、必ず先づ自ら戒め自ら實例を示し、以て全隊員をして、不節制、不德義、懶惰の氣風より遠ざからしむ可し。士官は常に其の一擧一動、一言一句が、部下の元氣に係はることを深く思はざる可からず。訓練良く、忍耐力ある軍隊は、國家の誇なり。而して此の誇は必ず自重、自制、克己と伴はざるべからず』と云ふ此の諭告は、實に又現代の狎れ易き道德に對して戒箴を與へたものではないか。

跨らうが、すべて爲放題だ。事務員の邪魔にならぬ限り、構内は總て少年等の世界である。

嘗てバンボルスト氏の著『働らく女』の序文としてローズヴェルトが與へた『種族の自殺』なる一文が、端なくも或る紹介者の誤解の爲めに、少なからず世論を惹起した。勿論ローズヴェルトの原文を親しく讀んだものは誤解しなかッたが、一體ローズヴェルトの論の要旨は『若し男子にしろ、婦人にしろ、自ら爲した過に非ずして、而も孤獨の生活を好み、かの家庭を樂しんで、多くの健全なる子女を擧ぐるの快を知らざる者は、余の深く同情する所であるが、………徒らに結婚を非認し、殊更に情を冷却して、子女を擧ぐるを好まざる男女は、事實上種族に對する罪人である。彼等は當然全種族から嫌はれ者として輕蔑さる可きである』と云ふ至極健全な思想なので、決して世間で喧ましく言ッた樣な、性慾を刺

達が一寸扉から覗いて『父様お先に』と挨拶して寝に就いたのが、今は家庭と遠くなッた爲め、この愛らしい聲が全く聞かれなくなッた事である。とは云へ此の不便があると同時に、行政部の重要な會議の最中に、ローズヴェルトが態々廊下に出て、其處で騒いで居る腕白少年を『靜に』と叱る必要も無くなる譯だ。

ローズヴェルトの家族は、誰も何か愛する動物を飼ッて樂しんで居る。中にも季から二番目の少年アルチー君の愛馬は、實に小さな可憐な馬であッて、道路を歩む際に、路の惡い所だけは抱いても通れるといふ程である。すべてローズヴェルトの子息達はやうやう鞍に跨り得るやうになると、直に馬術訓練をさせられる。是は獨立心と大膽とを養成する爲めに、特にローズヴェルトが設けた計畫の一である。ローズヴェルトの家庭は、常に自由放任で、少年は庭樹に攀ぢ登らうが、「官邸」の裝飾に

欒を樂しむことが實に深い。殊に子供と嬉戲して遊ぶ態は、無邪氣の極である。子供が六人ある中で、二人は既に丁年以上に達して、共に戲るには適しないが、他の四人とは頑是ない遊戲をなして、一日一度は必ず若がへる。其の家庭遊戲の中で一番面白いのは熊狩で、家の内ならば、廊下、外ならば芝生の上で四ッ這ひになッて、宛(まる)で芝居の樣に熊狩を演ずる。最初に熊になるのは、いつでもローズヴェルト自身で、四ッ這ひになッて唸りだす。すると四人の少年獵師が、發砲の眞似をして追ひまはす、捕へる。捕へられると直ぐローズヴェルトが獵師になッて少年熊を狩るといふ順序。その邊にある卓(テーブル)や樹蔭は皆熊の匿れ穴となるのである。

今度行政部が「大統領官邸(ホワイト、ハウス)」から離れて建てられたので、それがローズヴェルトに取ッて不便な一ッは、ローズヴェルトが深夜まで燈下にあッて國家の爲め行政部の事務を執ッて居る時、以前ならば可憐な子息

さぞかし此の單調無味な西部の生活は御氣に合はぬでせう。實際閣下は西部に生れて、其の趣味ある田園生活をなさる事が一番の御希望でせう』と言った。

すると、急にローズヴェルトの視線が其の人の全身に注がれた。ローズヴェルト夫人の顏にも妙な表情が現はれて居る。友人は尙ほ『左樣でせう』と言ふと、同席の一淑女が、

『貴方は未だローズヴェルト樣を一向解して居ません』と叫んだ。

『何故?』と其の人は問ひ返した。

『それではローズヴェルト夫人の事を御考へなさらないのですか。』

すると、其の人も始めて悟ッたやうに、ローズヴェルトの家庭の情の濃やかなのに驚いた。

ローズヴェルトは、其の奮闘的野外遊戲を愛すると同時に、家庭の團

統領は『あちらに漕いで、御待ち下さい』と言ひ捨てゝ、例の奮鬪的に巖に攀ぢはじめた。無論鎖の援けも借らずに。

それを登るには、手足の指尖を力にやう〳〵這ひ上るのであるから、實に危險千萬、一歩誤れば百尺の泥水に頭から墜ちねばならぬ。けれどもローズヴェルトは一向搆はず登ッて行く。あとに續くのは子息のセオドーアと、優男の大臣と二人だけ。然し、難なく攀ぢ越えて、夕暮には無事に官邸へ歸ッた。すると、市街では既に此の冒險が大評判で、或る者はそれは梯子で登ッたのだらうなどゝ噂した。

ローズヴェルトが家族と家庭とを愛する情は、實に常度を越えて居る。或る晩餐會の席で起ッた話であるが、ローズヴェルトが例の通り、同卓の友人に對ッて盛んな氣焰で、西部曠原の生活の趣味ある事を語ッて居ると、其の友人が『閣下は其れ程に自由な曠原生活を愛さるゝならば、

も或る長官で、隨分剛毅の人といふ評判であつたが、多少自負に過ぎるので、それを挫くといふのであつた。其の日大統領は、例に依つて先頭に立つて、悽ましい大股で歩みはじめた。一行も附隨て行つた。ポトマックの沿岸は、岩礁の險しいので名高いだけあつて、山の樣な巖石が多く道に横はつて居る。其の中でも最大の奇巖は、鋸歯の樣に鋭く尖つて居て、巖全體に鎖が懸けてある。通行人は其の鎖に依つて攀ぢ登るのであるが、老幼婦女の爲めには別に巖の下に船が浮べてあつて、船で迂廻すれば可い樣にしてある。

此の巖まで來ると、一行は暫く止まつた。『その船は私に』と一元老院議員は言つた。此の元老院議員は、勿論巖を攀ぢて登る勇氣があつたのだが、自分の威嚴に顧みて船を撰んだのである。『私も』と言つて例の自負長官も船に乘り移つた。そして大統領に對する座席をあけて居つたが、大

氣盛んな壯丁の一團を集めてワシントンの郊外で徒步競爭をやる。そして歸る時は常にローズヴェルトが先頭で、一寸も疲れた色は見えないのに、壯丁の一團は早くも氣息奄々、浴場や寢臺に急ぐのである。ローズヴェルトが斯樣な野外運動を爲す時は、屹度新參者を一人か二人か仲間に入れる、そして其の新參者が何れだけ勇氣があるかといふことを試みる。

これは二年程以前の話であるが、或る好天氣の午後、二三の友人を招いて、ポトマックの河岸を徒步したことがある。此の折、特に誘引狀を新任の一大臣に出した。此の大臣は近く大統領から、或る果斷にして而も頭腦の精緻なるを要する事を委任されたのである。まだ壯い人で、身體は華洒に、姿のよい優男であッたから、一ッ其の忍耐力と機略とを試みてやらうといふので、此の行に誘ッたのだ。尙ほ一人誘はれたのは、是れ

であッた。第二の馬はと同じく驅らせて見ると、稍ゝ刻み足に走ッた。そこで高さ三尺位な編垣を前に置いて跳び越させやうとしたら、臆病にもうろ／＼して編垣を嗅いでばかり居る。大統領は深い嘆息して馬から下りて手綱を馬丁に渡した。そして默ッて居るので、

『馬は如何ですか』と傍の知人が尋ねると、

『はあ、有難う存じますが、返して下さい私は馬を周旋して戴きたいと願ッたのです、兎ぢやありませんでした。』と大統領は知人が從順な馬を撰んだのを喜ばなかッた。

乘馬に次いでローズヴェルトの喜ぶ野外遊戲は徒歩である。徒歩と云ッても普通の人のする樣に、森の樹影や野原などに杖を曳く散歩とは全く趣が異ふ。ローズヴェルトのは血液も筋肉も沸きかへる樣な奮鬪的徒歩競爭である。ローズヴェルトが例の乘馬に飽くと、同じ樣な血

御注意なさらない方ですか。』

『左樣です。私は野外の遊戲、遊獵などを書いた文學は大好です。然し、野外遊戲と言ッても、競馬の樣なものは嫌ひです。人が自分の手脚で競爭する樣なことでなくては駄目です。』

斯うは言ッても、ローズヴェルトは馬に就いては決して冷淡でない。馬は彼の大好物で、牛飼童であッた昔から、乘馬に深い趣味を持ッて居た。そして其の乘馬も、亦彼に劣らぬ逸物で無くてはならなかッた。ローズヴェルト、大統領になッて間もなく、立派な乘馬が一頭獲しいといふので、或る知人に其の周旋を賴んだ。知人は大統領の乘用の馬なれば、若しもの事があッては、との懸念から、成るべく温和な馬二頭を撰んで「大統領官邸」に曳いて來た。ローズヴェルトは、試乘して見やうと思ッて、先づ其の一頭に跨ッて驅らせて見たが、步調が整ッて、隨分訓練を經たもの

性行

乗馬と徒歩競爭――家庭の人――見戯――熊狩の大將――大統領官邸の饗宴――大統領の宗教的生涯。

『閣下は文學を職業にしやうと思はれたことがありますか。』是れ曾て「大統領官邸(ホワイト、ハウス)」に大統領を訪ひ、ローズヴェルトの書齋を見て、澤山の書籍、繪畫、剝製動物、其の他小動物の飼養してあるのに驚嘆した客が發した語である。

『否、私の文學をやるのは唯、嗜好からです』とは主人の答。

『それでは閣下は別に、詩學、小說、論文、批評等に特種の課程を履まれたといふ次第ではないのですな。』

『私の研究したのは、唯、米國歷史と狩獵――殊に大熊などのことです。』

『それでは閣下は近代文學の大部を占めて居る心理解剖などに、一向

自己に對する新聞の非難に駁論などは大抵默殺する。否、多くは歡迎する。假令嘲笑でも、其れが事實であり、且つ面白ければ、ローズヴェルト大統領は悅んで讀む。唯、緣の廣い帽子を戴いて、乘馬靴を穿ち、頸巾を結び、眼鏡を光らせ、齒を剝いてゐる自分のポンチ畫には聊か眉を顰める。要するに、多くの場合に於て、寬容だが、事實に無い事を言ッて罵詈する樣な記事がある時は、非常に激怒して、直に例の滔々たる辯明を以て、何物をも洪水のやうに押し流してしまふのである。

を知るに異ならぬ。斯樣にして新しき記事、新しき思想は、逐一浚ひ採ッてしまふのである。彼が新聞紙を閲讀するのも、同じく此の方法で、而も一層迅速である。新聞紙上の彼の一瞥は、直に記事の要所を捕へる。余は三十年間新聞社會に居るが、未だ曾てローズヴェルト程の讀み方をなす者を知らぬ。斯樣な迅速な一瞥の中に、早くも其の記事に對する駁論などが胸中に浮んで居るのである。

新聞の事で思ひ出すが、ローズヴェルトが新聞に左右されるといふ世間の評判ほど、事實に相違したものはなからう。これは全く反對である。彼は都ての新聞の上に立ッて、新聞を導いて居るのである。勿論時として、故らに或る地方の激昂を買ふやうな事を企てる際、秘書官の一人を其の地に遣はして、新聞紙と爭論せしむることなどが無いでもないが、ローズヴェルトの遣り方は自ら他と異なッて居る。

ローズヴェルトは人名や年代を考證するのでなくて、事實を描く妙筆を有ッて居る。)好んで書籍の批評を試みるが、批評するにも、其の書籍を目の前に置いてするのではなくて、折々速記者に參考の抜書を持たせる位のこと、大抵は例の歩行きながらやるのである。批評する書籍は一讀過だけで、而も普通の人が二十頁も讀む間に一冊讀み終るといふ速さなのであるが、それでローズヴェルトの頭腦には明晰に映ッて居るのである。

ローズヴェルトの讀書法は、丁度造幣局の自動金庫の様に、見たいと思ふ所に自然と導かれ、直に書籍の要部が出て來る。それが正確で迅速である。彼の讀書する時は、さながら辭書の字でも探す様に視線の行を翔ッて居る。そして必要の個所に來ると礑と止まる。是は實に多年の經驗から來て居るので、丁度老船長が海上を一望して、早くも霧の罩むる

に口の中で讀みかへして居るが、暫く經つとペンと一番上の速記とを執ッて、一心不亂に辭句の訂正に取りかゝる。

ローズヴェルトの友人で、彼が此の著述癖を知ッて居るものは、訪問した時、必ず靜に側の椅子に座を占めて待ッて居る。さうすると、やがて或る章が纏まると、ローズヴェルトは額を擧げて、『今、前人未發の事を著はした』と言ふ。そして前にある原稿を取ッて講釋を始める。講釋に身が入ると再び起ッて又室內を步行しながら速記させる。斯んな風で文章は口を突いて出で、丁度速發銃の彈丸が發射されるやうに實に速い。折々清新な思想が湧いて、それを表はす言葉に窮した時は、姑らく其の場所だけを空白にして、全體が纒まッた後、筆を執ッて其の思想を適當の語にて綴り、之を插入することがある。

冒險的な狩獵譚を書いたり、歷史上の事實を描く外に、歷史家として

ローズヴェルトの著述の方法は獨特である。彼は先天的に自發的に書く、否、述べるのである。普通の著作者は大抵製本師(ブックメーカー)となッて、毎日麺包(パン)に責められて五六時間づゝも机に向はせられるのであるが、ローズヴェルトの著作の動機はそんなものではない。ローズヴェルトには素敵な文學的能力がある。丁度絲巻から絲を繰る樣に絶えず文章が湧いて出る、想泉が涸れぬ。事務の暇々の著述が、首尾整然として文調に些の弛緩がない。感嘆に値ひする事ではないか。

ローズヴェルトが著作するには、大抵は、室内を歩行しながら速記者に書かせるとして、一旦筆記を始めさせると、一瀉千里の勢で、もう幾許(これ)程書いたかなどいふことには一向眼を呉れぬ。その速記の原稿が活字に直されてから、始めて何頁あッたと知る位である。折々疲れた時には一寸速記者に一瞥を與へて椅子に身を横たへ、速記させた文句を徴か

關する記錄等も澤山ある。ローズヴェルトの著作は、すべて好評であッて、世間は其の價値を認めて居るが、彼は屢々謙遜して次の樣な話をする。曰く『曾てイダホの市街を散步して、不圖書肆に入ッて見ると、店に自著の『西部の勝利』が四冊飾ッてあッたので、それを指して書肆の主人に斯う言ッた。

『此の著者のローズヴェルトてのは何んな人ですか。』

『はあ、農家の子息で、狩の好きな青年です。』

『そんな青年の著述が好いのですかねー。』

『いえ、私は折りがあッたら、其の青年を呼び寄せて、耕作でも熱心にやる方が本を書くよりは金が儲かるよ、と言ッてやりたいのです。』

これには一言も無かッた』と。勿論これはローズヴェルトが謙遜しての談である。

西部の勝利　四冊　The Winning of the West.

紐育　New York.

荒原の獵者　The Wilderness Hunter.

阿米利加の大獵　American Big Game Hunting.

米國歴史中の英雄談　Hero Tales from American History.

諸方の遊獵　Hunting in Mang Lands.

米人の理想其他の論文　American Ideals and Other Essays, Social and Political.

篝火　Trail and Camp-fire.

驃騎隊　The Rough Riders.

クロムウエル　Oliver Cromwell.

奮闘的生活　The Strenuous Life.

等である。尙ほ此の他に、他人と合著の米國歴史や、種々の小論文、狩獵に

著作生涯を言はずして、ローズヴェルトの傳を語ることは出來ぬ。眞にローズヴェルトの著作的半面は偉大なものである。余が此の稿は無論ローズヴェルトの正傳ではないから、彼の著作の價値を云々することは他に讓らう。彼が著作中の代表的なるものは『千八百十二年の海戰』と題する一書である。是はローズヴェルトがハーヴァード大學を出でゝ後二年もたゝぬ中に出版されたのであるが、實に海戰記の模範とさへ評されたものである。其の他の著作を擧げて見ると、

野獵　Hunting Trips of a Ranchman.

トマス・ベントン傳　Life of Thomas Hart Benton.

知事モリス　Gouverneur Morris.

田園生活及び遊獵　Ranch Life and the Hunting Trail.

演習の爲めに發射した。』それから、次の軍費は何に費すか、と再び問はれた時、『次の軍費も同じく向ふ三十日間の演習に用ゐる爲めである。總ての軍費は燃やす爲めである。』

官衙的虚禮はローズヴェルトの最も憎惡する所ある。彼を圍繞して居る省局政治は、誰も彼も無意識な虚禮で、事務を執ッて居るので、實に繁褥に堪へぬ。或る委員が毎日同じ様に官省に出勤して、一週間許りも無爲な日を送ッて居たが、或る日の午後歸る時、同僚に向ッて『此の事務は又明日でも出來るから』と言ッた。

『明日でも！』と偶々側に居たローズヴェルトの唇から、思ひ掛けなき反響が來た。『委員諸君！「明日でも」などと言ッて居たら、ノアの箱船は果して出來たでせうか。』

委員は頗る恐縮したとのことである。

みられた。内部では職務の困難を訴へる、外部では、海軍を整頓するは合衆國に戰意あるに由るとの誤解を招きはせずや、と言ふのであッた。ローズヴェルトは勿論近き將來に於て、西班牙との開戰の避け難きを悟ッて居たが、出來るだけ世論を鎭めやうとして、新聞記者等には毫も戰爭の事を語らず、極力世間の戰爭熱を冷ますに努めた。さはれ胸中一片の畫策は漸く密室裡の執務の上に見はれて、正確にして周到なる準備は歩を進めたのであッた。

ローズヴェルトが海軍省の事務に精勵して居た時の名高い話がある。彼が次官となッて幾程も經ぬ頃、多大の軍費を議會に要求して之を得たが、二三ヶ月の後、再び又多額の軍費を要求した。議會は是が爲めに一驚を喫して、最初の軍費は如何にせしや、と質問した所、答へて曰く、『かの軍費は全部を擧げて火藥と彈丸とに費し、火藥と彈丸とはすべて

ローズヴェルトも、其の生涯の事を爲すには他人と軌を同じうする。軌を同じうしながらも、而も他人が不注意に看過する事を逐一精細に實行する。嘗て海軍次官をして居た時、ローズヴェルトは同省の事務が總て不秩序であッて、一向精細な統計も立たず、一朝事有る時は、如何ともすべからざる程の狀態なるを觀た。例せば、臨時に武裝せしめて艦籍に入れ得べき商船の船名、戰鬪力、船型、船員等の最近の統計表に於て、既に三艘の船は沈沒して居ッた。殊に其の中の一艘の如きは、破船の際、新聞紙は殆んど全頁を費して喧ましく之を報道したのであるにも拘はらず、統計表には毫しも訂正してはなかッた。即ち時の海軍省の事務が全く亂れかゝッて居ッたのであッた。

斯かる事務の沈滯が續々發見さるゝや、ローズヴェルトは、改革を斷行せむと企てゝ、非常な決心を示した。そして内外から盛んな批評を試

時にマイルス對ヨルビンの爭論があッたが、直に怒聲一喝の下に之を止めさせた。又當時最早社會が忘れかゝッて下火になッて居たサムソン對シュライの爭論に對して、マイルス大將が一文を草したことを、ローズヴェルト大統領は頗る激怒して、大將にして若し聽かずむは、法律上の手段さへ取ると言ッた。又ある折、海軍の二中將が爭ッた時も、大統領は有らむ限りの權限で彼等を罰した。ブルックリン海軍廠のマッレイ氏が、シュライ將軍の罪を鳴らして、將軍を卑劣、陰險と誹謗し、果ては逆賊とまで罵ッた一書を公にした時、直に大統領から其の官を免せられた。後國會に於けるシュライ將軍の一味が、將軍の爲めに計ッた議案を提出しやうとした時、ローズヴェルトは是をも立所に否定してしまッた。

て或る古參の長官と和解するのを拒んだ事で、ローズヴェルトの理由としては『あの古參はいつぞや余が某の件について質問した時に、言葉を左右に託して曖昧に葬ッて仕舞はうとした』といふので、其の憎惡の念を語ッた。其の事情は余が知ッて居たことであッた故、和解を計ッて落着さしたが、終局（つまり）ローズヴェルトの率直主義からして、これは彼の故參の長官に計る可き事で、自分の決斷すべき事でないと考へた事件について質問したのだが、其の長官がいゝ加減な返辭をしたので、ローズヴェルトの癪に觸ッたに外ならぬ。

通常の事には餘り峻嚴な態度を取らぬが、時としてローズヴェルトは暴君的な威權を振ふことがある。彼は又海軍にまれ、陸軍にまれ、其の上官にして、苟くも其の品位を墮すやうな爭論をなす時には、毫も其の辯疏（いひわけ）を聽かず、必ず一喝の下に是を止めさせる。彼が大統領に就仕した

く會はなかッた』など口を突いて出るのである。

ローズヴェルトに右様の癖があるので、時々余に、大統領は公平に人を判斷する人か、などと質問する者がある。余は答へる、彼が暫時思考した時は、必ず公平に判斷すると。抑も彼が判斷には、二ッの事實がある。第一は、彼が生來の無偏無私の心から人に接するにあたりて、先づ容貌を見て、それから後に性行を觀る。第二には、彼が多年の漂浪中に善いと思ッた人に惡い性質が含まれ、惡いと思ッた人物から善い點が發見されたりしたことが屢々あッたので、是が爲め、彼が人を見る先天的の眼光は多少鈍ッた感がある。ローズヴェルトは元來が輕快な性質だから、初對面の人は大抵善人を以て許し、紹介さへよくば隨分意外な好意に接する。

但し右の例外として余の記憶して居る一事は、ローズヴェルトが嘗

例せば『罪ある者を逃す勿れ同時に無垢なる者を護れ』『表裏を併せて語れ』等である。尤も前者はグラントの句を繼ぎ足したもので、後者はクリーヴランドの『眞理を語れ』から脱化したのだと言ふ人もある。

ローズヴェルトは、即座に奇警な言辭を發する天賦を有ッて居るが、此の天賦は却ッて穩健なる言辭の出づるを妨げはすまいか。演說をする時でも、著作をする時でも、彼は思ふ儘を率直に、何の躊躇することもなく、發表するのであるが、彼が天賦の諷刺や寸鐵殺人的の警句は、屢々事を極端に走らせる。で、ローズヴェルトは動もすると最上級の事ばかりを言ふ。例せば、一寸した善事でも『最も完全なる善人が、最も完全なる正直の動機に由りて爲したる善事』などと言ふ。又普通の人か『喜ばしい（プレジュアー）』と言ふ所をローズヴェルトは『大悅（デライト）』と言ふ。『今の訪問者は實に余が會ひたいと願ッた人である』とか『此の樣に余を大悅（デライト）させた人には實に長ら

の一例は、嘗て英國女王ヴィクトリア陛下が崩御になつた時、彼が亞米利加全體を代表しての弔詞に『吾が大統領マッキンレー氏の變死の際、貴國が表されし弔意に酬ひん爲め、貴國女王ヴィクトリア陛下の崩御を痛む』と始めて、無暗な均勢を取つたのは頗る奇異ではないか。又米西戰爭の際、ローズヴェルトが大佐として例の『驃騎隊(ラフ、ライダー)』を率ゐて戰つた折敵の爆發彈の猛烈にして、味方の將士に死傷多きを報じた文中、『ハーヴアード出身にして勇敢比類なき青年士官スタンレイ・ホリスター氏戰歿し』といふまではよかつたが、『彼にも劣らぬ勇敢なるエール出身の青年セオドーア・ミラー氏は既に重傷を負ひて起たず』と足したのは、これも例の均勢癖が惡い實を結んだ一例となる。

誰でも豪(えら)いものになると、必ず其の談話中の特殊な言句が目立つもので、其の言句は屹度簡潔で力あるものだが、ローズヴェルトにもある。

公衆は十分に彼が主義に同情して居る。然し、かの黒人を磔刑にして其の上焼き殺すやうな慘酷を責めた彼の論文を讀むと同時に、彼が編んだ黑人刑法の用意周到なるを見ねばならぬ。又彼が勞働の正義を說き、是が保護を論ずるときは必ず附き物として世の暴利を占めるものを責める、トラスト問題に亘る。屹度『吾人は暴行を罪すると同時に、必ず狡猾を罰せざる可からず』と言ふ。是れ皆ローズヴェルトが常に尋常の眞理を斷言するの用意である、公平を求むる熱心である。嘗て舊敎信者の一人が新敎徒に虐待されたのを、ローズヴェルトが保護した時、公衆に語りて『若しこれが反對の場合で、新敎徒が苦められる時には、又新敎徒を保護する』と附け加へて言ッたことも其の一例とならう。

斯樣にローズヴェルトは何事をも公平に平等にならさむと欲するのが癖であるが、時として此の癖が不用意な惡結果を招くことがある。其

であッた話をする。現に彼が大學の卒業論文は博物學の一部を論じたものであッた。

彼の友人リード氏は勿論ローズヴェルトの學問慾を賞讃する一人であッたが、折々厭味を言ッてローズヴェルトの癖を笑ッた。例へば、『セオドーア君、君の學問に就いて僕が一番感心するのは、君が「十誡」位は易々と產み出す創見だ、君は偉い。』と言ッたことがある。これはローズヴェルトが、平凡な眞理まで事々しく斷言するを譏ッたのであるが、此の譏は必ずしも中らない。ローズヴェルトが公平を求むる熱心は、折々平凡なことでも周到にこれを斷言せざるを得ないのである。必ずしも「十誡」を創造するのでは無い。

其の一例は、かの黑人問題である。彼が黑人保護を主張する時は必ずや、それが結局白人の利益であるなど精しく說き立てる。勿論文明國の

セオドーア・ローズヴェルトの性格を表はして居る。彼の傳記者の一人が、其の序文に彼を紹介せる語は『有望なる天賦の著作者、立法官、遊獵家、軍人、改革家、事務家』であッた。

ローズヴェルトは無論是等を兼ねて居るが、必ずしも是れだけではない。ローズヴァルトが博物學者であるといふことは、多くの人は未だ知らぬ。彼がハーヴァード大學在學中の書齋は、其の裝飾が主として動物の剝製や毛皮やであッた。生きた昆蟲や、爬蟲類も、其の室內を横行し、鳥も囀ッて居た。今も彼の同窓は、ローズヴェルトが澤山の蝲蛄を捕へて、大學教室で分類しやうと携へて來る途中、ボストンの電車の中で皆匐ひ出して大騷ぎをした話や、又大學の寄宿舍で大きな龜が廊下に横はッて居るので、驚愕の餘りによく檢べて見ると、南洋に居る友人から ローズヴェルトに送ッた大龜が、靴箱から出て湯場へ水吞みに行くの

多能

心機一轉の妙――博物學者――語勢を強くする弊――平凡の眞理――著作家としてのローズヴェルト氏――著作の方法――新聞紙の讀み方

英國の或る雜誌が、ローズヴェルトの初めて大統領となッた時に掲載した詩に、

『クローマー卿の一味、ゼフ・ダヴィスの痕跡、
リンコンの少量も含み、
キッチエナー、ビスマーク、及び獨逸的意力あり。
ヂユピター、チヤンバレンをも偲ばしむ』

といふのがあッたが、是れ實にローズヴェルトの多能なるを言ッたに外ならぬ。上院議員フォレカー氏が『洋服を着た機關車』と評し、カンサスのドスター氏が『電氣の噴火坑』だと綽名したのは、皆ローズヴェルトの偉大なる精力に驚いたのである。又『突然のセオドーア』といふ語も大に

である。

吾輩は更に此の近世的英雄の面目を、フランイシス・イー・ロイブ氏の新著によりて窺はうと思ふ。ロイブ氏はローズウェルト氏に極めて親近なる人であッて、ローズヴェルト氏を知ること最も深き一人である。以下の各章は即ちロイブ氏の著述から譯出する。けれども譯というては少しく不當かも知れぬ。何となれば字句の末に於ては必ずしも一々原文の拘束を受けぬつもりであるし、且つ排列も多少變へる豫定であるから。

に負ふ所が多大である國民が國民的生活に於ける日常の職分を勤める習慣は、既に是れ國民が國家の危急に應ずる所以である。平常徒爾に日を送りて、時機到るを待つ軍隊に望みの無い如く、平常の職分を盡くすに慣れぬ國民は、一朝にして好國民の典型となることは出來ぬ。我が合衆國が最も要するものは、異常の天才でない、赫々の壯觀でもない。寧ろ全國民と其の代表者との正直、正道、公德、私德の具備である。——是れ正しく我が合衆國の過去の歴史であつた。我が合衆國が所期の國となる——少しく強言して——吾人の思ひ通りの國家になるとならざるとは、全く國民全體が完全なると否とに由る。完全なる國民とは、畢竟するに、公私を問はず、如何なる日常些細の職分と雖も、之を盡くして怠らぬものである。』（千九百年五月二十一日、アルリンゲトンに於ての演說）

是れ即ちローズヴェルト氏の所謂眞の勇士である。又其の典型の一斑

平和の時にも適切な教訓である國民が國家危急の秋に死を惜まぬは、嘗に人生の美事たるのみならず、必ずさうなくてはならぬ事で、若し此の心掛け無きときは、如何なる他の德を以てしても償ふことが出來ぬが、國家の爲めに死ぬると同じく國家の爲めに生きねばならぬ、さうでないと國家は立ち行かぬ。死す可き時のみ國家に竭せば可よいとしたら、國家は諸君が生存中に爲すべき價貴き業務を取られてしまふことになるではないか。

此の種の會合、例へば國家創立者の勇氣と愛國心とを稱たゝふる會合とか、南北戰爭其の他國內に起ッた戰爭の戰士の爲めに催ほす會合とかに出席する每に、男女を問はず、日々の極些細な職分まで一々之を遂行することの至極肝要なるを痛切に感ぜざるを得ない。戰爭の時の成功は、常に戰爭前の長き年月の間、各個人が成した職分の總計

るの能ある者は、必ずや夫の古い教訓の『平時勇敢なる働を心掛けない者は、いざと云ふ時が到來しても決して勇敢に働けぬ』といふ言葉が、戰爭と同じく平時にも痛切である事を深く感じたであらうと思ふ。諸君よ、諸君が始めて軍隊に入ッた時――斯く言はゞ必ず諸君の中に自ら思ひ當る人があらうと信ずるが、――諸君は先づ戰爭とは敵軍を屠り、敵の城を拔く類の壯快な事ばかりだと思ッたに違ひない。然し、多少經驗を重ぬるに從ッて、戰爭の第一要義は、極めて平凡普通なる職分を遂行することで、而も最も完全に此の平凡普通の職分を盡すことだと悟ッたであらう。戰場に在ッた者は、何人も確かな知識と決斷とで、隨時起ッて來る此の職分を果したのである。決して盡し甲斐ある職分が來るまでと袖手しては待たぬ。目の前に來る職分は其の性質の如何を擇ばず、直に之を遂行したのである。これは實に

を續けた。されば こそ艱苦に慣れぬ大學出身者と、素朴なる西部牧夫とが相合して、一ヶ月を出でざるに戰ッて勝たざるなき驃騎隊を現出し得たのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

驃騎隊の花々しき活動は、サンジュアン丘突撃の苦戰によりて最もよく世に知られて居る。（内外出版協會發行『ローズヴェルト』集を見よ、ローズヴェルト自記のサンジュアン丘の合戰、粗豪騎士、其の他記事論説十一篇を載す）而してローズヴェルト氏が驃騎隊の閲歴にて何を學びしかは、彼が著書の一節『眞勇の根柢』を讀まば領かる丶所があらう。

眞勇の根柢

『余は茲に戰死者の靈を祭るに方りて、生存者に對して一言すべき事がある。苟も此の戰役に參加して、多少とも自己の經驗から教訓を得

事に精しからざるローズヴェルト中佐は、乃ち友人ウッド大佐を推して驃騎隊長となし、嚴肅なる新式訓練を全隊に施すことゝした。然し、ウッド大佐は、他にいろ〳〵戰爭の準備の爲めに奔走する必要があったので、自然ローズヴェルト中佐自ら訓練に從事しなければならぬ場合が多かった。中佐も久しからずして、全隊を操縱すること恰も十指を動かすに異ならぬやうになった。元來驃騎隊には牧夫、大學出身者、其の他僧侶も居れば少年も居る。また士官中には、町長もあれば政黨員もあるといふ有樣で居たから、之を一團として訓練することの如何に困難であったかは想像に餘る。

斯かる雜駁なる一團が、能く軍隊的活動をなすに至らむことは、平常ならば殆んど望み難い事であらうが、今は目前に國難を控へて居る秋である。義勇軍として驃騎隊に在る者は、誰しも衝天の意氣を以て訓練

彼が驃騎隊編成の際に示した用意は實に周到であッた。其の人選をするにも、自らサン・アントニオに行ッて、有望なる牧夫を召集した。初め其の募集區域をアリゾナ地方の四屬土に限りて、四十三州の壯丁は、此の奇矯なる新計畫に與かることを得なかッたのであるが、後、隊の人員增加を企てた折に、新に二百五十名を四十三州の有志から採ることゝなッた。で、ローズヴェルト氏一たび募集區に到れば、立どころに四方の壯丁が集まり來るといふ有樣で、忽ちにして豫定の人員を超過し、之を拒むに困難なる程であッた。中には大學生などもある。殊にローズヴェルト氏が母校のハーヴァード大學出身者の如きは、募集人員に超ゆること十數倍であッたといふ。

豫定人員千名は忽ちに滿ちて、盛名あるローズヴェルト氏は此の隊の中佐となッた。さて一刻も忽せにすべからざるは訓練である。軍隊の

ヴェルト氏は、やがて開戰と同時に、其の職を辭して、自ら戰場に馳驅せんとした。かの有名なる驃騎隊（ラフ、ライダー）こそは、實に彼が海軍次官を辭せむとする刹那、俄に萠した計畫であッて、彼は突然軍隊生活に入ッたのである。

　彼は素より專門の軍人ではない。嘗て十年前に紐育守備隊の大尉であッたこともあるが、それは表面だけのことに過ぎぬ。斯く一向に訓練なく、規律なき守備隊の大尉たりし外には、毫も軍事的經歷の無い彼が、今親ら一隊を率ゐて實戰に參加せむとするは、一種の好奇心に驅られた企てかとも見えた。驃騎隊の編成、實に其の初めは之を一個の空想として窃に危ぶんだ者もあッたのだが、圖らざりき其の成功は彼の通りに目覺ましかッたのである。驃騎隊は米西戰爭中最も特色ある一團體として、長く歷史に其の名を留むるに至ッた。此の驃騎隊の活動こそは、實にローズヴェルト氏が生涯中の花々しくも美くしい一節である。

ルト氏の生涯の偉大は世界的の偉大ではないか。

「花々しき」事はローズヴェルト氏に求められぬ。さはれ松杉の高き茂みに燕子花の開いたかと疑はるゝは、ローズヴェルト氏が「驃騎隊(ラフ、ライダー)」の活動である。驃騎隊は、彼が生涯中の美くしい花である。吾等は先づ茲に、圖らずも松杉の間に認め得た一個燕子花の美を語りて、追々に此の二十世紀的英雄の眞面目を窺はう。祖先を究め、生立ちを詳かにする秩序的傳記は他に讓りて、吾等は其の性格の各所を截斷して見るのである。

⁂

玖馬(キウバ)は自由ならしめざる可からず、西班牙は討たざる可からず、の聲は、遂に千八百九十八年に至りて爆發した。米國の上下は鼎の如く沸騰して、西班牙國と開戰したのである。

海軍省の一室に靜坐して、窃に戰鬪の畫策をなしつゝあッたローズ

るには及ばぬ。現代が要求する偉人の典型は、海を彼方の岸なる米國にあるではないか。見よ、大統領ローズヴェルト氏は、咲いて間もなく凋む花ではない、梁となる幹である。平和、正義、事業、奮闘、すべて二十世紀の舞臺に活動すべき偉人の要素は、皆、彼に體現されて居るではないか。過去の英雄は最早骨董品に過ぎぬ。活動を欲するものは、骨董品を捨てゝローズヴェルト氏が活きた性格に刮目せねばならぬ。

ローズヴェルト氏は、剛健なる幹の偉人である。されば人目を眩惑する「小説的」は無い。二十世紀偉人の典型である。されば、あやしき神秘もひそまぬ。彼は松杉の聳ゆる如く聳えて居る、攀ぢよと吾等に瞰望んで居るではないか。されば吾等は彼を傳せむとして、語る可き麗はしき事蹟の乏しいのに窮する。大學修業と云ひ、選擧こ云ひ、狩獵と云ひ、著作と云ひ、皆、何處にも見らる可きものばかりである。しかも尚且つローズヴェ

吉思汗も花顧みれば振天動地の大英雄が面影は、多くは是れ、一朝にして凋み果てた麗はしい花である。されば昔から大英雄と謳はれた者の事業は、大抵、其の活動して居た間だけ人目を眩惑したに過ぎぬ。彼等は歴史に宿ッた花である。花を生命の眩惑である。彼等は迚も梁とはなれぬ。彼等では家を建てられぬ。

古の英雄は多く花である。彼等には神秘が纏うて居る。風雲に乘じ風雲に隱れた彼等は、吾等がついて辿るべき跡を示さぬ。奈翁を見よ、亞歷山を見よ、成吉思汗を見よ。吾等はかゝる偉人に對する時、茫乎として手を束ねるより外はない。彼等を學ぶは雲を踏むより危い。彼等を望むは虹を望むに異ならぬ。摑まんと寄れば永久に隔て行くタイムが聽さぬ。然り、彼等は過去の英雄である。二十世紀は最早や花の如き事業に喝采して居る時代ではない。聽されぬタイムの隔てを強ひて近寄らうとす

偉人研究第七編 ローズヴェルト言行録

花の驃騎隊

花の英雄――二十世紀偉人の典型――非小説的――驃騎隊(ラフ、ライダー)――眞の勇士

池の面に紫の影を映(うつ)して咲く燕子花(かきつばた)こそは花を生命(いのち)の草である。黄なる粉を吹く風に散らして嘯く松と杉とは、雲を貫く高き幹が生命(いのち)である。家を建つべき樹木には、花瓶を飾る麗はしき葩(はなびら)は無い。花瓶に活(い)けられて芳香(かほり)を放つ優(やさ)しき花は、梁(うつはり)となる強き幹には宿らぬ。知らず花を生命(いのち)の柔らかき草が貴いか、幹を生命(いのち)の太(ふと)き樹木が貴いか。

奈翁(ナポレオン)は麗はしい花であッた、散りて跡無き花であッた。亞歷山(アレキサンダー)も花、成(ジン)

一千八百九十八年米西戰爭の際、義勇騎兵隊(驃騎隊)の中佐、大佐たり。

一千八百九十九年より翌年に至るまで、紐育州知事となる。

一千九百一年、合衆國副大統領となる。

一千九百一年九月十四日、大統領マッキンレイの死後、亞米利加合衆國大統領となる。

ローズヴェルトの略歴

亞米利加合衆國大統領セオドーア・ローズヴェルトは、一千六百四十九年和蘭より亞米利加に移住せる人の後裔なり。

一千八百五十八年、十月二十七日紐育市に生る。

一千八百七十六年、ハーヴァード大學に入る

一千八百八十年、ハーヴァード大學を卒業す。

一千八百八十二年より八十四年まで、紐育州會に在職す。

一千八百八十四年紐育に於ける共和黨大會の議長たり。

一千八百八十九年より九十五年まで、合衆國文官勤務委員たり。

一千八百九十五年より九十七年まで、紐育市警務委員長たり。

一千八百九十七年より九十八年まで海軍次官たり。

二

目次

加藤信正譯編
五十嵐越郎刪修

ローズヴェルト言行錄

東京
内外出版協會

偉人研究 第七編

ローズヴェルト言行録

